
彼方に届く声

古河新後

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼方に届く声

【Nコード】

N5421Q

【作者名】

古河新後

【あらすじ】

世界を戦火に巻き込んだ巨大な戦争が終結して、数十年。その爪痕は世界各地に残ったものの、今を生きる人々は復興への道を着々と歩んでいた

行方不明の両親を捜す女性、アルカイン「ファイアレス。空から降ってきたと言う謎の男、レイヴン。2人の出会いが、やがて人々を、世界を巻き込む事件につながっていく。

現在の場所：巨大樹の町“リーゼ・マーノ” 4 / 12 更新：「大いなる母へ」「受け継がれし命」

フェルスタウンへ旅の女性へ【】

プロローグ

茶色の岩と強い日照りが照りつける荒野を一台のバイクが走っていた。

荷台に大きめのケースをくくりつけた銀色の大型バイクである。土煙を上げながら走るそれに乗っているのは、1人の女性。

延々と続く日上がった大地には、枯れた草木の他に生物の白骨も転がっていた。

それをちらりと見て、女性は呟く。

「これ以上おなか空くとあぁなっちゃんそう・・・」

グウウウウウウ

空腹であった。

もう2日間、何も口に入れていない。最低限の水分はとっているが、荒野を渡る事に対する準備不足を後悔していた。

「でも、もう少し・・・」

この先にある街に彼女はどうしても行きつく必要があった。

幼いころ、自分の目の前から消えてしまった両親。その母の情報をようやくつかんだ。

どうしても会いたい。

その一心でここまで来た。

「もう少しで会えるかな・・・」

顔も覚えていない。でもどんな人だったかは覚えてる。優しくて温かかった。抱かれると心から落ち着いてすぐ泣きやんだ。そのまま眠ってしまった。

会って、何を話すべきかは分からないけど、とりあえず会う。

その時、看板が見えた。

ブレーキをかけ、停車。その内容を確認する。

【5キロ先

炭鉱の街、フェルスタウン

】

「よし、もうひと踏んぱり！」

水筒の水を少し飲み、再びアクセルをふかした。

？

街のはずれにあるバー。

筋骨隆々たる男たちが昼間なのに酒を飲み交わしながらゲラゲラ

と談笑する場所。

「最近は何物かとねーな」

「このへん掘りつくしちまったんじゃねえの？」

「東にもう1キロ掘れば何とか」

この町には炭鉱があり、飲んでいるのは大概が炭鉱の男たちだが、中にはそうでない種類の客もいた。

「おう、いつも御苦労さんだねえ。炭鉱マンの諸君」

挑発的な態度で会話に割って入ったのは、炭鉱のタンクトップとは正反対のパリツとシワの無いシャツを着た数人の男達。

「最近、ウチへの献金が遅れてるそうだが、責任者は？」

シャツ軍団の中心核であろう男がそう告げる。髪をオールバックに決め、シャツは赤く、そして、とりまきに比べ背が極端に小さい

いわゆるチビなおっさん。

「いま、チビつつたやつ誰だあ！！！」

「兄貴、落ち着いてください。空耳です」

部下が冷静になだめる。

「献金つて、それはあんたらが勝手に言ってることだろうが！」

「そうだ！町長を脅しやがって！」

数名の炭鉱マンがいきりたつ。

「おーおー、これだから体ばっかりつかって脳筋共は野蛮だって

いうんだ。俺たちに逆らえば、どうなるかってことまだ分かってないのか？」

静かなその言葉。その一言で周囲の空気がいっぺんに冷えた。まるで、怪物の唸り声を聞いたかのようにバーが沈黙する。

「待ってくれ」

「あん？」

落ち着いた声で即座に沈黙を破ったのは、口髭を蓄えた細身の炭鉱マンだった。

「私が今の責任者、ライリーだ」

「はん。そうかい、わざわざ出てきてくれてありがとうよ」

偉そうに出た割りに赤シャツの男は、ライリーを完全に見上げる姿勢だった。なんか矛盾した光景である。

「兄貴、椅子です」

気がきく部下がさり気なく椅子を用意。赤シャツは何気なくその上に直立し、ライリーとの視線が合うようにする。

「すまない、最近炭坑内での落盤事故が多発している。そのせいで鉱石がうまく採掘できない状態だな。君たちの言う献金とやらが滞っているのはそれが原因だ」

「だからといって、献金の遅れは許されねえぞ？」

その言葉が理不尽だと言う事は炭鉱の人々全てが分かっていた。

要は一方的にいいがかりをつけただけなのだこの連中は……

「それなりの代償を払えば期限を延ばしてやらなくもない……そうだな、あんたの後ろに隠れている娘をしばらく預らせてもらうとかな」

赤シャツがニヤリと笑う。

「む……」

ライリーの眉がぴくりと動く。

ライリーの娘は、まだ幼さが残るものの立派な大人の女性だ。こんな連中に連れて行かれればどんな目に合うかも分かっている。

「おとうさん……」

ギョツとシャツを掴んでくる娘を父親として裏切ることなど出来ない。だが、どうすればこの場を切りぬけ

「こんにちはー。水もらえませんかー？」

> i 1 7 5 9 0 — 3 7 3 <

たかく、しなやかな女性の声が聞こえ、まわりが一斉にその主へ注目する。

扉を開けて来店したのは、ジャケットを羽織った青い長髪の女性だった。

突如、謎の注目を浴びた女性は当然ながらうつろたえる。

「え？いや、あの水・・・」

ライリーは言う。

「わかった、しばらく娘を預けよう」

「おとうさん!？」

驚愕する娘をよそに、その指がびしりと指差す

「もう1人の娘をな」

青髪の女性を、そりやもうなんの迷いもなく。

「へ?」

「ほお、お前にもう1人娘がいたなんてな・・・」

赤シャツの方もそれが嘘だと分かっていた。だが、青髪の女性は、ライリーの娘よりずっと魅力的だったのだ。

ジャケットに隠れていてもわかる見事なナイスバディ。白くて、健康的な肌の質感。なにより魅力的なのは、腰までとどく透き通るような青い長髪。

ここ最近めつたにお目にかかれない美女と言っても過言ではなかった。

「ま、娘さんよ。運が無かったと思って」

「あのー、すいません。私、背が小さい人って好みじゃないの・・・」

「『『『』!!!???'』』』」

一瞬で空気が凍りついた。

さつきから起こる謎の空気に女性は訳が分からない。

「お、お、俺が背がち、ち、ち、ち、ち」

「だから、背が小さい人は好みじゃなくて・・・」

しかも丁寧にとドメの一言。

ブチン、と赤シャツの中で何かが破裂した。

「上等だあ！このオンナあ！ブチ殺」

懐から銃を抜こうとした赤シャツは 次の瞬間凍りついた。

その額にはすでに銃口が向けられていた。向けているのは、青髪の女性。

「気に障ったなら謝るけど、銃を向けるんならそれなりの覚悟があるのよね・・・」

「う・・・」

「いったい、いつの間に抜いたというのか。しかも、赤シャツの男がもつ銃より一回り大きい。重量もあるはず。なのに、それを神速ともいえるスピードで!？」

「どうなの？言っとくけど、この状況でも勝てると思ってるなら、あなた相当なバカよ」

赤シャツの銃はまだ懐。対する女性の銃は引き金を引くだけ。

誰の目から見ても勝敗は決していた。

「くそつ・・・!」

赤シャツは懐から何も出さず手を戻した。

「兄貴・・・」

「引き上げだ・・・!この女!覚えとけよ!ゼッてえ仕返してやるからな!」

お決まりの捨てゼリフに少し付け加ると、後ずさるようにシャツ

の軍団は店から退散して行った。

女性は銃を後ろ腰にあるホルダーにしまった。

「ふう・・・なんとかなったな。よしみんな、仕事に戻ろう」

「つて、ちよつと待てえええいッ!!」

訳が分からないまま巻きこまれた女性が叫ぶ。

冗談だよ、とライリーが続ける。

「ありがとう助かったよ。さすが腕の立つ旅人だ」

「巻き込んだでしょ、今！」

「なに、気にする事はないさ」

「そのセリフおかしくありません!？」

いろいろと理不尽すぎる中、ライリーの娘が女性の近くに寄って来る。

「あの・・・ありがとうございます。おとうさんを責めないであげてください・・・。あと・・・お水を」

「なんか納得いかないけど・・・お水ありがとう」

女性は喉が渴いていたのか、一気にコップの水を飲むとフウと息をはいた。

「私、アンナリーって言います。みんなはアンナって呼びますけど」「うん、よろしくアンナ。私はアルカイン。アルでいいよ。ていうか状況の説明が欲しいんだけど」

青髪の女性　　アルは苦笑いを浮かべていた。

(なんか厄介事に巻き込まれた予感・・・)

フェルスタウンへ旅の女性へ【】（後書き）

この作品は「彼方からの声」の世界設定を修正し、人物を流用した
ものです。これからよろしくお願いします。

フェルスタウンく母の形見く】

先ほど店にいたゴロツキはティーンズファミリーの長兄・レドという名前らしい。

ティーンズファミリーは2ヶ月ほど前にやってきて、瞬く間に街を掌握してしまったギャング集団である。

町長を脅し、勝手に『献金』として金を巻き上げているのだ。

「この街って警察とかいないの？」

「一応はいるんだが、長いこと平和が続いてたものでね。今じゃ、炭鉱マンの方が喧嘩慣れしてる分強い」

ライリーが説明していると、後ろの仲間が乗り出して来る。

「しかも奴らとんでもねえ切り札を持ってやがる・・・」

「切り札？」

「“フレーム・ギア”さ・・・」

“フレーム・ギア”とは15メートル近い機械の巨人の総称。形状や武装などは様々だが、1機あれば小さな街は簡単に武力制圧できてしまう脅威の兵器。だが、定期的な整備や莫大な維持費が必要になるため、滅多にお目にかかれない代物でもある。

「どんな形してるの？」

「それが、誰もその機体を見たことが無いのさ」

「じゃあ、あいつらのハツタリってことじゃないの？」

「ああ、私もその線を疑い始めている。近々、反抗作戦を実行するつもりだった。ここにいるのはそのメンバーさ」

「大丈夫？いくら、体が丈夫だからって、相手が銃を持ってたら戦えないんじゃない？」

「この街には数年前まで軍隊があつてね。それが解体されてからは、みんなここで働いているんだ。つまりは、ほぼ全員が軍隊所属だったってわけだ」

どうりでさっき銃を見せた時、眉ひとつ動かさないわけだ。見慣

れてるなら、驚いたりはしないだろう。

「そこで提案なんだが　私たちに協力してくれないか？」

「協力？」

「そう、奴らを街から追いだす大きな作戦だ。失敗が許されない以上、戦力は出来るだけ多い方が良い」

「あの・・・来て数十分でそんな話されても・・・」

「もちろん報酬は出すよ。見たところ、食糧や水を手に入れるためにこの街に寄ったのだろう。すべてうまくいったら無料で補給しよう」

「うーん」

アルは悩んだ。ライリーに見抜かれたとおり、今の自分には旅を続けるための物資が全くなかった。

それ以前に、自分は人捜しのためここに来たのに、それがまさか街一つの命運を賭けた戦いに巻き込まれようとは・・・。

いろいろ考えた末、答えを出した。

「　他をあたります」

「そうか。引き受けてもらってなによりだ」

「会話の流れがおかしいですよ!？」

「さっきの小競り合いでレドは君を敵としたのは間違いない。ティーンズファミリーはすでにここ以外の市街地は掌握している。どちらにせよ、何かの目的でここに来たのかもしれないが、情報は得にくい状況だと思うよ」

「ぬぬ・・・!」

「どちらにせよ補給も必要なだろう?ここまで荒野を渡るために相当消耗しているはずだ。物資も君もね」

そのとおりだった。食糧が底をついていただけでなく、5日近い長旅でアルは疲れ切っていた。さっきは相手がこちらの勢いに呑まれてくれたが、あの人数とそのまま戦っていたら、まず勝ち目はなかっただろう。

「我々なら君を安全にかくまってあげられる。なにしろ娘を救って

くれた恩人でもあるからね」

「飯だつてたくさん食えるぜ。このマスターの飯は格別さ」

「なんなら俺の歌でも聞いてリラックスしてくれてもいい」

「バカ言うな。耳が裂ける」

「そうだよめろ」

「ひでえなおい！」

「ははは」「だーはっは」「かかかか」

男たちは笑う。その光景には、この町の魅力が感じ取れた。

楽しいからこそ、かけがえのない場所だからこそ、皆で守ろうと思ひ、そして笑いあえる。

「わかりました。協力します。おいしい食事とあたたかい寝床つきなら」

「ありがとう。感謝するよ」

希望に湧きあがる中、遠巻きに見ていたアンナは、誰にも聞こえないくらい小さな声で呟いた。

「似てる、あの人に……」

「くそ！あの女！絶対ゆるさねえ！」

アジトに戻った赤シャツの幹部　レドは、ブチブチの悪態をつきながらボスの部屋のドアをたたいた。

「親父！いるか！」

ティーンズファミリーは身内で幹部を構成しており、一人息子のレドは、次期のボスという事になるため、組織内ではちやほやされてきた。

「ん？あなた」

一方的なノックだけで、すぐ部屋に踏み込んだレドは、そこに父親以外にもう1人いるのに気づく。

「おや？あなたは御子息の……」

白衣を着て、オールバックの髪型に片眼鏡をつけた知的な男。話
はしたことはないが何度か会った事はある。たしか、親父のお得意
様だったか。

「こ、これ、レド！客人に失礼であろう！座りなさい！」

父親に言われ、レドはその隣に座った。

「申し訳ない。息子が失礼を」

「いえいえ、若者は元気が一番ですよ。気にしないでくださいレン
ボウさん」

ハハハ、と笑って済ませる。年配じみた口調だったが、男は見た
目にも相当若い。それにどこか言い知れない存在感があった

「ところで、話を戻したいのですが？」

「あ、例の依頼の件なのですが、もうしばらく時間をいただけない
でしょうか・・・なかなか広い町でして、搜索も難航しておりま
すゆえ・・・」

普段は堂々としている父親がバツの悪そうにしている。まるで別
人になったようだ。それほどに目の前の男は大物なのだろうか、と
レドは疑問だった。

「ええ、私も時間を必要とするのは分かっていました。確実に見つ
けてくだされば結構ですよ」

「はぁ・・・ありがたいことです」

「ただし、期限はとうに過ぎていることはお忘れなく。よろしいで
すね？」

「も、もちろんです！必ず！」

「ハハ、では失礼しますよ」

男はゆっくり立ち上がると、黒衣を揺らしながら部屋を静かに後
にした。

その背中が見送り、完全に気配が消えるのを悟ると、レンボウ
は大きなため息をついた。

「親父。誰なんだよ今の奴。それに依頼って・・・」

「・・・簡単に済む依頼だと思っていたが、仕方ない」

レンボウは、息子にお得意様について自分の知る限りを話した。その上で、自身が受けた依頼についても詳しく話す。

「これを探せつてのが依頼なのか？」

レドが受け取った写真には、赤い宝石が埋め込まれ、その周囲を奇怪な文字が囲んでいる金属のプレートが写っていた。

「そうだ。この町にあるのは間違いないのだが、私の部下だけでは人手が足りない」

フェルスタウンは東の住民街と西の鉱山街に大きく分けられている。住民街はそれほど規模は無く、調査が終わるのも早かった。しかし、鉱山街はそうはいかなかった。住民街と比較すると、その規模は4倍近くになる。地形も複雑で、土地勘が無い者にとっては迷路と同じだ。

調査の難航も仕方がなかった。

「この際だ。お前にも調査に加わってもらいたい。私の部下たちよりは鉱山街に出入りしているからな。多少強引でも構わん。いざとなれば切り札もある」

「」

翌日の早朝

「すいませんアルさん。私の買い物につきあわせてしまつて・・・」
アルとアンナは早朝の朝市に出向いていた。その日の食事の材料とアンナの個人的な買い物のためだ。

「いいよ。私の方からついて行きたいつて言つたんだし」

2人がいるのは住民街の中央ショッピングエリア。先ほどの鉱山特有の油くささとは違ってかわり、規則正しい石畳や広葉樹が街路に植えられている清潔な町並みがあった。とはいえ、早朝のため、どの店も閉まつており、人の気配はほとんどない。

「なんか別の町みたい。それに真新しいし」

「気づきました？住民街は最近になってできたんですよ」

「なんで増えたの？」

「住んでて言うのも変なんですけど、鉾山の環境は人が住むにはあまり良くないんです。お隣の家は有毒ガスとかが壁から噴き出したり、岩が転がり落ちて来るなんて事もあったみたいです」

「すごいところね・・・」

「そんなこんなで、けがをする人もいるんです。そんな人たちが治療する時に衛生状態の良い場所に病院を作ろうって、町長が」

「という事は、住民街の始まりは病院になるわけか・・・」

「そうです。その病院からだんだん広がって、今の町があるんです」

「へえ・・・あ、聞きたかったんだけど、アンナは何歳？」

「え？16ですけど・・・」

（お母さんが来てるのは15年前って聞いたから・・・覚えてるわけないか）

「あの、何か？」

「ううん。こっちの話」

「そうですか。あ、ここです。私の来たかった場所」

話しながら進んでいると、古ぼけた小さな雑貨屋の前で止まった。

「こんな早くから開いてるなんてね」

「この店主、私のひいおじいさんなんです。昨日連絡いれて、開けてもらってるんですよ」

「へえ・・・ひいおじいさん？」

カランコロン、とドアについた鈴を鳴らし、アンナが店に入る。アルもその後続く。

「おじいちゃん。いますか？アンナです」

呼びかけると、店のカウンターの奥から、のれんをくぐって、腰の曲った老人が現れた。

「おお、アンナ。元気にしとったか？」

「おかげさまで。おじいちゃんも元気そうです」

「ホホ、自家製のドリンクの力じゃよ。孫は元気しとるか？」

「ええ」

「そうか、おや？珍しい。旅人さんかの？」

「昨日この街に来たアルカインさんよ」

「あ、初めまして、アルカイン＝ファイアレスと言います」

「そうですか。遠いところわざわざ……。街は今、ティーンズフアミリーとやらがうるついでおりまして、なにかと物騒ですが、許してください」

「いえ、おじいさんが謝ることじゃ……。あの、いきなりで失礼ですが、今おいくつになりますか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あのか？」

首をかしげて、目をつむり、黙り込んでしまったひいおじいさん。なにか怒らせてしまっただろうか、と心配していると、

「だめですよアルさん。その質問をされると、ひいおじいさんは若い頃の思い出の世界に入ってしまうますから」

「え、いま、回想中？どれくらいかかるの？」

「お父さんが言うには5時間」

「5時間!？」

「かかっても終わりません」

「終わらないの!？」

「おじいさん。アンナです。おはようございます」

呼びかけると、ひいおじいさんがゆっくりと目を開けた。

「おお、アンナ。ばあさんと出会った青春時代は素晴らしかったのぉ」

「それより、頼んであったものを取りにきたんですけど……」
「そうじゃったな。少し待っておれ」

そう言ってひいおじいさんは店の奥に再び戻っていく。

「結局、何歳かは分からないのね……」

「100歳を越えてるのは確かですけどね」

そんな事を言っているのと、ひいおじいさんが出てきた。手に持っていたのは懐中時計と一升瓶。

「待たせてすまんかった。壊れた部品がようやく届いたんじや。また動くようになった」

「ありがとうございます」

新緑を思わせる落ち着いた緑の懐中時計。鎖は新しいもの使っているようだが、本体はなかなかの年代を感じさせる。

「珍しい懐中時計ね」

「お母さんの形見なんです。どうしても動くようにしたくて」

お母さんの思い出。かけがえのないものだ。すぐくわかる。

「ほれ、こっちは旅人さんへの贈り物じゃぞ」

「贈り物？」

アルが、ひいおじいさんの差し出した一升瓶を受け取り、疑問符を浮かべる。

「あの、これなんですか？」

「わしの長生きの秘訣じゃよ。さっきいった自家製ドリンクじゃて、飲むといい」

ふたを開けて、匂いをかぐ。

「う、これアルコールが・・・すみません苦手なんです」

「なんと。酒が苦手とは、損じゃの。人生の半分は酒と共にあると
いうのに」

返された瓶を残念そうに受け取るひいおじいさん。

「大丈夫ですか？アルさん、ふらついてますよ？」

「あー、私、お酒って極端に苦手なの・・・今、凄い強かったみたいで、匂いかいだのはまずか

「思考がマヒする。」

まともな受け答えができなくなり、アルの意識は床に倒れたところで途切れた。

> i
1
7
6
3
3
2
—
3
7
3
<

フェルスタウンく母の形見く 〔 〕 (後書き)

初めは、早めに更新。しばらく駆け足で行きましょう。

フェルスタウンく仮面と宝玉く

「お、アンナ戻ったか　うお!？」

「アルさん!どうしたんだ!？」

「まさか連中にやられたんじゃない」

動かなくなつたアルをアンナが背負つて、酒場に戻ってきた時にはもう大騒ぎだった。

心配で大勢の男たちが駆け寄ってくる。

「大丈夫。少し、酔っぱらつたみたいで」

「こんな朝からお酒でも飲んでたのか、アルカインさんは？」

男達を分けて、ライリーが呆れ顔でアルを見ていた。

「いや、飲んだんじゃないの。嗅いただけで・・・」

「嗅いただけでこれか。どれだけアルコールに弱いんだこの人は・・・」

「。。とりあえず、奥のベッドで寝かせてあげなさい」

「うん。あ、お父さん」

「ん？」

「前してくれた15年前の人の話・・・アルさんはやっぱり関係あると思う」

「・・・証明ができるのか？」

「ない。でも、今までになく、強く感じる」

「わかった。お前にまかせよう」

「うん」

住民街のはずれにある臨時整備所

「親父、これが届いた切り札か？」

「うむ。【ゲツシュ・ボンバード】という機体らしい」

レンボウとレドの視線の先には、長大な6つの砲身がついた巨大物体があった。

シートが被せられており、全体は見えないが、重厚なフォームは圧倒的なまでの威圧感を放っている。

「こいつがあれば、もう怖いものなしってことだな。へへ」

「操作も単純だ。いざとなればすぐにでも動かせる。まだまだファミリィは大きくなるぞ。フッフ」

親子でほくそ笑んでいると、

「ボス、こちらでしたか」

部下が1人やってくる。

「どうした？」

「実は搜索していた物の情報を掴みました」

その報告にレンボウは、にやつく。

「ほう」

「どうも、鉦山街に住んでいる女が持っているのを見た奴がいます」

「その女は誰か分かっているのか？」

「アンナリー」スタン。鉦山管理責任者のライリーの娘です」

ライリー達は休憩時間を終え、またもとの作業場に戻って行った。

この店に残っているのは、アルとアンナの2人だけである。

「……………頭痛い」

意識が戻ったアルは、2日酔いのような頭痛に苦しんでいた。

「大丈夫ですか？」

「やっぱり、お酒なんて悪魔の飲み物よ……。におい嗅いだだけ

で人の意識を奪うなんて……」

「それ、アルさんが特別なんだと思いますけど……」

「いたーい・・・頭いたーい・・・いつそ殺して・・・」
シーツに包まってゴロゴロのたうち回る姿は、わがままな子供のようだ。

「それはそうと、お話したい事が」

「なに？今度にできない？もうダメ・・・死んじゃう。何も聞こえないわ・・・」

「あの、とても大事な話で」

「う、やば、い。せ、洗面器・・・ちようだい・・・」

「きゃあ！？ちょ、ちよつと待ってください！10秒だけ我慢してください！ー！」

~~~~~しばらくおまちください~~~~~

「はあ、はあ。ホント、お酒って最低だわ・・・」

それだけ言つて、アルは、再びベッドに勢いよく身を預けた。

アンナはアルの様子がどこかおかしいことに気づいた。

やけに顔が火照っている。息づかいも荒い。明らかに2日酔いと別の状態も含まれている。

「　　凄い熱・・・！アルさん、今、濡れタオル持ってきますから！」

5日間に渡る荒野の旅の緊張が解けたため、アルの体にはこれまでの疲労が一気に襲いかかっていた。

加えてあまり衛生環境も良くはない場所である。体調を崩すのも無理はなかった。

看病用具を取りに行くため、駆け足で部屋から出ようとするアンナ。だが、その足が突如止まった。

なぜなら、そこに招かれざる客が現れたからだ。

「　　よお。探したぜ娘さん」

レドだった。あいかわらずの赤シャツを着崩したスタイルで、部屋に乗り込んできた。

「ど、どうして　　きゃあ!?!」

たちまち取り巻きに捕まるアンナ。

「くっ!!!」

アルが疲労した身体を無理やり動かし、机の上のオートガンを取ると素早く照準する。

しかし

「おっと、これでも撃てるか?」

レドがアンナを盾にしている。撃てない……!

「やれ!」

合図とともに、取り巻きが一斉に襲いかかる。

あっという間に銃を奪われ、床に組み伏せられた。

「くう……」

「なんだ、あっけなかつたな。もっと手こずると思って人数揃えて来たのによ」

レドは勝利の笑みを浮かべる。

「待ってください!この人は、今、熱があるんです!離してあげてください!」

「そうはいかねえよ。この俺様にたてついたんだ!相応の報いを受けてもらうぜ!」

「そんな事のために、こんな乱暴をするんですか!?!」

「まあ、本当の目的はこいつじゃない。お前だよ、アンナリー!! スタンさん」

「……え?」

「こいつを見る」

レドが懐から取り出した1枚の写真には、紅い宝石の埋め込まれたプレートが写っていた。

「これを探してるんだよ。お前、知ってるんだろ?」

「し、知りません!これっぽっちも!全く!全然!」

アンナは額に汗を浮かべながら首を何度も左右に振る。こんなに嘘丸出しなのも珍しい。正直なのは美しく、罪である。

「・・・お前、嘘が下手って言われないか？」

「・・・アンナ・バレバレ・・・」

レドはおるか、捕まっているアルすら苦笑いしている。

「そ、そんな、アルさんまで・・・」

そして、アンナは涙目。

「兄貴、どうやらこの家の中には、ないみたいですぜ」

「連れてけ、アジトで楽しみながらゆつくりと聞きだしてやる」

こうして、アルとアンナはレドの一団に拉致されてしまった。

戻ったライリー達が事態に気づくのは数時間後の事である。

「頭いたい・・・体もいたい・・・」

「・・・まだ言ってるんですか？」

ティーンズ・ファミリーのアジトに連れてこられたアル達は、手足をロープで拘束され、とある一室に監禁されていた。

「とはいっても、さつきよりだいぶマシになってきたかも」

そう言うアルだったが、まだ顔が赤いうえ、呼吸も荒い。むしろさつきより悪化しているように見える。

「・・・ごめんなさい。私のせいでこんな事に巻き込んでしまって・・・」

「気にしなくていいよ。巻き込んだのはアンナじゃなくてライリーさんだし・・・」

ハハハ、とさわやかな笑顔をしているアンナ父の顔を思い出す。

「でも、アルさん」

「はいはい。私は気にしなくていいって言ったでしょ？人間、生きてると何かしらのトラブルに巻き込まれるんだから」

アルは、心配させまい、と笑顔をつくる。

それを見たアンナは小声で呟く。

「……やっぱり、間違いない」

「なに？」

「アルさん、もしかしてこの街に来たのは……人捜しのためですか？」

「そ、そうだけど……どうしてわかったの？」

「私が生まれて間もない頃、旅人がこの街に来たらしいんです。その人の名前は……」

「名前は……？」

「『アリステラ』。その人が、言い残していた言葉があるんです。父はその人に落盤事故から救ってもらったお礼に伝言を引き受けて、私にも教えてくれたんです」

「どんな言葉？」

「困ったら彼を頼りなさい。その道しるべを置いていきます」

「道しるべ？」

「はい……その伝言と、ある物を預かりました。でも、もうあの男に取られてしまいました」

「……どうして話してくれたの？」

「なんとなく、アルさんがその人に似てたんです。1歳の私でもはつきり覚えてたくらいの人ですから。もし、関係なかったら、すいません」

「……関係ないなんて事、全然ない。だってその人……」  
そこで、アンナは気づいた。アルの表情がとても晴れやかなことに。

決してから元気ではない。心の底から喜んでいる。私の旅は無駄ではなかったと。

「ずっと探してた、お母さんなんだから」

「親父。これでいいのか？」

レドは、アンナから奪った例のプレートを、父親のもとへ届けていた。

プレートは手の中に収まるほど小さい、チェーンを通したペンダントだった。

「おお！まさしく探していた物だ！お前に協力をもらって正解だった！」

「へ・・・ま、たいしたことじゃなかったかな」

思いもよらぬ贅辞に思わず、頬が緩むレド。

「あとは、あの方に連絡をとればいい。ご苦労だったなレド」

「ああ。ところで、2人ほど捕まえてきたんだが、あいつらどうする？」

「お前の好きにしてください。私は忙しいからな」

「そいつはいいな。へへ」

レドがにやけながら、その場から去ろうとする。

その次の瞬間　突然、窓ガラスが砕けた。

「なに！？」「うお！？」

それに乗じて、何者かが部屋の中に飛び込んでくる。しかし、ガラス片から身を守ることで精一杯な2人は、対応する事ができない。瞬時に駆け抜けた侵入者は、レンボウとすれ違つと、あつという間に屋内へ消える。

「くそ！ヒットマンか！？親父、怪我はねえか！？」

「ああ、なんとも　しまった！プレートが！」

「なんだと！？」

驚いた事に侵入者は、すれ違つた瞬間、レンボウからプレートを

奪っていた。信じられない手際の良さだ。

「親父！侵入者を追ってくれ！あのプレートの価値を知っているのなら、相当の刺客に違いないぜ」

「お前はどつするんだ？」

「俺は念を入れて、『ゲツシュ・ボンバード』を起動させる！」

部屋の外を数人がドタドタと走りまわる音が聞こえる。

「なんか騒がしくなってきたわね」

「本当ですね・・・何かあったんでしょっか？」

アルの隠し持っていた小型ナイフで、拘束を解き、2人は脱出の機会をうかがっていた。

幸い、扉の近くに人の気配は感じない。見張りがいるわけではなさそうだ。

女2人と思って甘く見られているらしい。好都合だ。

「ちよつと待ってて、今ナイフを使ったピッキングテクニックを披露するから」

「すごいです。なんか強盗みたい」

「ふふ、サバイバル技術って言って。もうちよつと」

バゴツ

ドアが外れた。もう一度確認する。鍵ではなくドアが外れた。

ナイフを持ったまま、呆気にとられるアル。

「わあ、すごい！『ぴつきんぐ』ってドアを外す技術なんですね！」

「いや、違うから！私のせいじゃないから！」

そんなことを言っていると、部屋にドアを破壊した人物が入って

きた。

「・・・目立った外傷はなさそうだな」

声からして男と思われる人物と判断する。

その顔は凹凸の少ない白い仮面で覆われていた。稲妻のような黒いペイントが一筋走っているのが特徴的だった。

加えて、肩・胸部にフレームのついた黒いコートを着ていた。

「あなた、いつたい・・・？」

アルは警戒態勢をとり、アンナを自分の後ろに隠す。

「・・・敵ではない」

「信用しろ、というの？」

「証拠だ」

そう言って、仮面の男は何かを投げてよこす。

反射的に受け取ったそれは

「これ、私の銃・・・！」

紛れもなく奪われていたアルの銃だった。

「いたぞ！こつちだ！撃て！」

入口の破壊に気がついた敵が、部屋の外から、室内にマシンガンを発砲する。

仮面の男は即座に反応し、丸ごと持っていたドアを盾にする。アシトのドアは、どれも鉄板が仕込んであるようで、銃弾を完全に弾いている。

「説明は後だ。援護する。この場から脱出するぞ」

少し迷ったが、この場を切り抜ける事を優先する。

素性は知れないが、どうやらこの男は、ティーンズ・ファミリーと敵対しているようだ。今は協力するしかない、とアルは判断した。銃の安全装置を素早く外し、臨戦態勢をとる。

「もう1つ渡す物がある」

仮面の男が、懐に手を入れると、今度は小さな物を投げってきた。

アンナがそれを受け取る。

「これ・・・これです！私がアルさんに渡したかったもの」

「ペンダント・・・？」

「はい。これはアルさんの物です　お返しします」

アンナから手渡されたペンダントのようなプレートをアルはそつと受け取る。

埋め込まれた真紅の宝石に触れると、ほのかに熱を帯びている気がした。

「俺は正面で暴れる。その隙に行け」

そう言つと仮面の男は、盾にしていたドアを、外にいる敵の集団に向かつて、投擲した。

「うわぁ！」「ばかな！」「嘘だろぉ！？」

回転しながら飛来する鋼鉄製の扉に、口々に叫び、散っていくギヤング集団。

「アンナ！しっかりついて来て！」

「は、はい！」

銃撃の止んだ隙を見逃さず、アルとアンナが駆け抜ける。

投げられたドアをちらりと見ると、壁に突き刺さつて、摩擦熱で煙を上げていた。

鉄板が仕込んであるなら、相当な重量があるはずだが・・・

「やるぉ・・・」

倒れていた敵の1人が身を起こし、逃げるアル達に銃を向けようとする。

だが、発砲はなかった。その銃身が飛来したナイフに切断されたからだ。

「　次は手を落とす」

「ひいッ！！？増援を呼べ！こいつはやべえ！！」

「こちら、南部屋前！手強いのがいる！応援を頼む！」

応援を呼ぶ間も、起き上がった男たちがマシンガンを撃とうとする。

しかし、仮面の男は目にもとまらぬ速度で、回転するナイフを次々飛ばす。

瞬く間に全ての銃身が切り落とされ、男たちは丸腰も同然の状態にされた。

「く、くるなー！」「あわわわ！？」「にげろー！」

新たなナイフを構え、ゆっくりと前進して来る仮面の男の威圧感に圧倒され、男たちはたまらず逃げ出した。

ティーンズファミリーのアジトはフェルスタウンから少し離れた場所にあったため、脱出に成功したアル達は走って街に向かっていった。

もう日は沈み、かすかな夕暮れの名残りが周囲を照らす。

「はあ、はあ……」

「アルさん……やっぱり身体の調子が」

「大丈夫、これぐらい……！またおぶってもらう訳には」

そこまで言ってアルの体がバランスを崩して倒れる。

「アルさん！」

慌てて、倒れたアルを起こそうとするアンナ。

「先に行ってアンナ……早くお父さんの所に」

「イヤです！アルさんも一緒です！」

「私は1人で何とかするから……」

「そんな身体で何ができるんですか！もう少しで」

「街についたのになあー！」

「……!?」

スピーカー越しに荒野に響くレドの声。

声のした方を振り返ると、巨大な影がこちらに向かってくるのが見えた。

「あ、あれって……」

「“フレイム・ギア”……!?」

2人は驚愕する。はったりかと思っていたが、そうではなかった。連中の『切り札』は確かに存在していたのだ。

『この俺様専用のフレイム・ギア【ゲツシュ・ボンバード】から逃げられると思うなよお!』

レドが自慢する【ゲツシュ・ボンバード】は、キャタピラの上にダルマを乗せたような姿をしていた。ボディから前方に伸びる6つの長い砲身。サイドにある細腕にはマシンガンをそれぞれ装備している。

「アンナ!走って!」

せめてアンナだけでも……!

『おっと!そうはいくか!』

機体の砲身の1つが火を噴いた。強力な榴弾がアル達の前方に着弾する。

「うあっ!?!」「きゃあっ!?!」

かなり離れた位置に落ちたにも関わらず、凄まじい爆発の衝撃に襲われ、アル達は転倒した。

衝撃で体が痺れる。動けない

『はっはー!どうよ!絶対に逃がさねえからな!お前らはここで終わりだ!おとなしく降参して、許してくださいって言えば命だけは助けてやるぜえ?』

怖い　これが“フレイム・ギア”の力……。次元の違う破壊力を前にして生身の人間が立ち向かえるわけない

「 終わり・・・じゃない」

「アル、さん・・・？」 『・・・なに？』  
アンナもレドも、目を見張った。

「 やつと手がかりを見つけたの・・・」

アルは立ちあがる。

「 私は絶対にツ・・・！！」

持っていた銃をまつすぐに敵へ向ける。そこにあるのは迷いのない、強い意志。

「 生きて、お母さんとお父さんに会ったからっ！！！！」

その時、左手で握りしめたプレートに刻まれた文字が真紅の光を放った

だれも知らないはるか上空。夕闇の彼方に、扉は開く  
『ファースト・シグナルの発信を感知 座標を確認 出撃  
態勢に移行 システム【レイヴン】射出 』

空から強烈な光を帯びて、それは落ちて来た。  
着地の衝撃で大地が揺れ、瓦礫が舞い上がる。  
大気が乱され、風が吹き荒れる。

アルには何が起こったのかわからなかった。

でもなんか懐かしい

そう思った時には、気を失っていた。

> i 1 7 7 1 3 — 3 7 3 <

フェルスタウン〜仮面と宝玉〜【】(後書き)

急速更新中〜急速更新中〜

## フェルスタウンへ降ってきた男【】

『フレーム・ギア』だと!?!』

上空から突如落下してきたのは、まぎれもなく15mの機械の巨人。

しかし、その姿は【ゲツシュ・ボンバード】とはまるで異なる。太い腕部と脚部。バランスのとれた装甲デザイン。完成度の高い、完璧な人型。外見的な特徴はなんと言っても、頭部にある2本の角と後頭のパーツから伸びる銀色の“髪の毛”であった。

その佇まいは力強い“鬼”を彷彿とさせる。機体の色は、蒼。

土煙がしだいに晴れ、ゆっくりと直立した蒼いフレーム・ギアは、背後にいるアンナに一言告げる。

『その女。その倒れてる奴と岩陰に隠れておけ』

男の声だ。それも若い。そして、どこか淡々としていて感情がこもっていないように聞こえた。

アンナはとりあえず指示に従い、気を失ったアルを背負って、岩陰に身を隠す。

『な、なんだてめえ!そいつらの仲間か!?どういうことだ?一体どこからきやがった?!』

レドは自分の優位性が消えた事に、浮足立っていた。

『空から来た・・・お前の敵だ』

『へ、そうかい・・・ならくたばれ!』

レドがトリガーを引く。砲弾が轟音とともに敵のフレーム・ギアめがけて発射。

だが、蒼いフレーム・ギアは最小限の傾きだけでそれを避けた。はるか彼方の誰も居ない場所に榴弾が着弾する。

『う・・・』

『・・・』

蒼いフレーム・ギアは無言のまま。一步、ズンツと【ゲツシュ・

ボンバード】に向けて踏み出した。

フレーム・ギアに関しては素人のレドにも分かる。相手の技量が相当なものだと。

また一步　　歩みが早まる。

『く・・・！』

分が悪い　　いや悪すぎる！

また一步　　更に早まる。

『くそがああああ！！』

【ゲツシュ・ボンバード】の砲身がランダムに砲撃を始めた。

それを皮切りに、蒼いフレーム・ギアが一気に加速する。

次々に襲いかかる榴弾を紙一重でよけつつ、相手の懐に潜り込んだ。

『ちい！！！！』

レドが近接防御用のマシンガンを浴びせる　　前に、銃身を青

いフレーム・ギアが握り潰した。

【ゲツシュ・ボンバード】の胴体に強力な蹴りが打ちこまれる。

だが、転倒はしない。キャタピラで、しっかりと地に踏みとどまる。

蒼いフレーム・ギアが、高く跳躍した。上空から勢いをつけ、攻撃の破壊力を上げるためだ。

だが、それはレドにとって、願ってもないチャンスだった。

『はっはあー！勝負を焦ったなあ！！』

【ゲツシュ・ボンバード】が背中に背負っていた大筒を展開する。

そこには破格の破壊力を持つ特大ミサイルの弾頭が乗っていた。

直撃すれば、小さな町を粉々に吹き飛ばせる代物だ。ましてや、

蒼いフレーム・ギアは空中。避ける事は出来ない！

『俺の勝ちだあー！！くたばりやがれええ！！』

ミサイル発射。ジェットエンジンで加速し、一直線に敵に突進。

「ああ・・・」

言われたとおり岩陰に隠れていたアンナは、その光景を見ている

ことしかできなかつた。

誰もが、ミサイルで木っ端微塵になる蒼いフレーム・ギアの姿を想像した。

だが、そうはならなかつた

『 ふん。ライセンスト! 』

蒼いフレーム・ギアの腕の側面に付いているブレードが透きとおった光を帯びた。

勢いをそのままに、向かって来るミサイルに正面から突進

真っ向からたたき斬った。

『 なんだとお!!? 』

真っ二つにされた弾頭が、遅れて爆発。その爆力を背に受け、銀色の髪を持つ巨人がさらに加速する。

流星と見間違えるほどの速度で白く輝くブレードが一閃する。

数秒の時間が過ぎたような錯覚 だが、実際は1秒にも満たない一瞬。

頑丈な【ゲツシュ・ボンバード】の装甲は、縦一文字に切り裂かれていた。

『 そ、そんな・・・うそだろ 』

切断面から火花が散り始める。

勝敗は完全に決した。

蒼いフレーム・ギアは、戦闘不能になった【ゲツシュ・ボンバード】に背を向ける。

『 くだばるのは、お前だ 』

一言、静かな呟きがその場の時間を再び動かす。

ブレードの輝きが消えると同時に、両断されたダルマ型の機体が火を噴きだして爆散。

その爆炎は、蒼い装甲を一瞬だけオレンジ色に染め、銀色の髪を風になびかせた。

「くそおー！おぼえてやがれええー！」

どうやら緊急脱出装置が搭載されていたようだ。レドの乗ったカプセル型のコックピットは、爆風に飛ばされ、はるか彼方へ消え、星になったのだった。

「す、すごいです・・・」

目の前で起こった事が現実である事を未だに信じられないアンナは、目を丸くするばかりであった。

すると、蒼い機体の胸部の装甲が、突然左右に展開した。

その内側に隠されていたハッチが開き、中から1人の人物が出て来る。

真紅のウェーブがかかったショートカットで、なにやらゴツゴツした黒いジャケットを着た若い男。

爆炎の逆光で、影になってよく見えないが、その両目が薄く金色の光を放っているのがとても印象的だった。

「目立つ外傷はないな・・・オレを呼び出したのはその女か」

日の入り寸前の荒野に風が吹く。

紅髪の青年の左耳に下がった金色のイヤリングを風が揺らし、チリン、と音をたてた。

アルが目を開けて、初めに見たのは電球の下がった天井だった。

ゆっくりと体を起こす。額に乗っていた濡れタオルが膝の上に落

ちた。

傍らを見ると、椅子に座ったアンナが、うつむいて居眠りをしていた。

彼女は顔や腕に絆創膏や包帯を巻いている。

ホツとすると同時に、あの後どうなったのか、という疑問がわいてきた。

ベッドから降りる。ところどころ体が痛かったが、体調を崩す前よりはずっと楽になっていた。

部屋の外の様子を簡単に見回してみる。

小さな待合室が見え、施設全体が白くデザインされていた。

「あ、病院か」

ここは、フェルスタウンの市街地エリアにある、総合病院の一室だった。

「あ……アルさん！」

アルが振り返ると、アミーナが抱きついてきた。

その目から涙がこぼれる。

「目が覚めたんですね……！よかった……」

「ごめん……心配かけたね」

アルもそつとアミーナを抱きしめる。

もうだめかと思った。でも生きていられた。その事を今はただ喜んでいた。

その後、特に体の異常も見当たらないとのことで、昼ごろには病院側から退院の許可が下りた。

ふと治療費の事について『ハッ!?』と不安になったが

「いえいえ、街を解放してくれた恩人からお金なんてとれませんよ」

と受付の女性に軽く言われ、なんのことだか全く身に覚えがない

のだが、とりあえずお礼を言った。

それから、街のどこを歩いてモ英雄のようにもてはやされ、アルは少しの間、混乱状態に陥っていた。

食べ物の露店の人は、安い物ならタダで持って行けと言う。(もちろんもらった)

カメラマンが写真を1枚撮らせてくれと言う。(かなりの枚数撮られた)

酒屋の店主が一升瓶を受け取れと言う。(必死に断った)

もうもみくちやに近くて、鉾山エリアに戻るまで、数時間かかった。

「な、なんなのこの騒ぎ……?」

やっと静かな酒屋に戻ってきて、椅子に座り、フニヤッ、とくたびれる。

「すいません。なんか街のみんなは『アルさんがティーンズファミリーを街から追いだした』って思ってるんです」

「追いだしたって……あいつらいなくなったの?」

あの気絶した後からの記憶などさっぱりないアルは、その情報に目を丸くした。

「あの後、何があったのか教えてくれる?空から何かが降って来たあたりから覚えてなくて……」

「はい。長く話すのと短く話すの　どっちがいいですか?」

「……短いとどれくらい?」

「謎の男は金色の目をしてました　終わり。わかりました?」

「いや!わからないから!」

「じゃー長々と説明しますね。あの後　」

細かい説明が続いたが、要点をまとめるところとなる。

・蒼い機体は『ゲツシュ・ボンバード』を破壊し、その後、地面に沈んで消えた。

・パイロットらしき『金色の目』の男はアルを抱え、病院まで運ぶと、ついてきたアンナにまかせ、医者が来る前に姿を消した。

・アルが戻ると同時にティーンズファミリーが街から引きあげたため、街の人々は『アルの活躍により街が救われた』と勘違いしている。

「その『金色の目』の男には、あれから会ってない？」

「そうなんです。本当に街を救ったのはあの人なんですけど・・・」

「うーん」

首をかしげるばかりのアル。

その時、外から叫び声が聞こえた。

「おい！その屋根の上で寝てる奴は誰だッ！？」

「ん？」「え？」

その声になり、2人そろってトコトコ店の外に出る。

「どうしたんですか？」

「おお！アルさん！目が覚めたのか！ライリーに知らせないとな！

あ、いやそれよりも屋根の上にいる奴だよ！」

炭鉱から休憩で帰ってきた男が指さす先を2人で見上げる。  
すると

「ああー！ー！ツ！！この人ですアルさん！この人！『金色の目』の男です！」

アンナが手をばたつかせ、思わぬ再会に慌てる。

「え？」

アルが再び見上げると、男は空を仰いで寝転がっていた。そこから微動だにしない。

「うーんと・・・」

そんなに高くない屋根だが、梯子なしで登るには無理がある。

アルは周囲を見回し、建物に隣接する岩の壁に目をつけると、そっちに向かって勢いよく駆けだす。

岩を蹴り、壁キックの要領で軽々と屋根に上った。

ゆっくり近づき、男の顔を覗き込む。

『金色の目』かどうかはわからなかったが、肩と胸部に大小の装甲板がついた黒いジャケットには所々ベルトが巻かれていた。その下にハイネックのインナーを着ている。動きやすさを追求したとされる長いズボンやブーツにも各所に装甲の様なプレートがついていた。

赤い髪をなびかせる『金色の目』の男は　寝ていた。

まぶたを閉じ、仰向けになった姿のまま全く動かない。

「……………もしもし」

「なんだ？」

「のツ!!?」

呼びかけた瞬間、男の目が即座に開いた。

驚いたアルは、思わず数歩後ずさる。

「……………もう動けるようだな」

「あ、え?まあ……………はい」

ゆっくりと立ち上がった男の目は確かに金色だった。

「起きたなら先に済ませておくことがある」

「あの、いろいろ説明　」

アルが言いかけたところでその言葉を止めた。いや、話せなくなつた。

なぜなら　その口が、男の口でふさがれたからだ。

> i 1 7 8 3 4 — 3 7 3 <

「……………ツ!!?……………ツ!!?」

あまりに突然の出来事に、我に返るまで一瞬遅れた。必死に男を離そうとするが、信じられないような力で抑えられており、全く離せない。

数秒かかって、ようやく男がアルを解放した。

顔が真っ赤のアルは、半ば放心状態でフラフラとその場にへたり

「こんだ。」

「どうした？早く降りるぞ」

「何事も無かったかのように言う男。」

「あ、あはは・・・そうね。その前に私もひとついい？」

「なんだ？」

ユラリと立ち上がったアル。次の瞬間、強力な右フックが男の右頬にクリーンヒットした。

「・・・なにをする」

「やかましいッ！！なにをする、はこっちのセリフよッ！！いきなりなんなのよッ！！」

「なんのことだ？」

「今！あんた何したかわかってるのッ！？」

「『DNA登録』だ」

「・・・・・・・・・は？」

「『DNA登録』だと言っただろ。唾液からが一番とりやすい」

男の言っている事がいまいち良く分からないアルは、その場で止まってしまった。

「『DNA』ってなに？」

「知らないのか？人体の遺伝子情報の事だ。俺の所有者になる以上は必要になる」

「だから一体なんの話をしているのよ！？私はいきなりキ・・・」

「」

「・・・キ？」

「キ・・・キ・・・とにかく今されたことが許せないのよ！謝りなさい！」

「よくわからんがすまん。これでいいか？」

「く・・・納得できないー！！」

「？」

自分は顔一面が朱色に染まって地団駄踏んでいるのに、顔色一つ変えない男に腹がたった。

「アルさん。どうしたんですかー？」  
下からアンナの声が聞こえ、アルは我に返る。  
とりあえず、さっきの件は保留にして、目の前で首をかしげる男  
から話を聞かなければ・・・

ほぼ無人の酒場に入った3人（さっきの鉱山の男は仕事に戻った）  
は、さっそく金色の目の男から話を聞くことにした。

「で、あなた誰なの？」

アルが率直に正体を尋ねる。

「オレは『対戦争抑止兵器』と言う生体兵器の一種だ」

「生体兵器ってなんですか？」

「生きている武器、と考えるといい」

「はあ」

「で、名前は？」

「オレか？」

「そうよ」

「・・・名前は無い。好きに呼べ。お前の『武器』だ」

男の金色の目がアルを見据える。

「・・・あの、『お前の武器』、ってどういう意味？」

「お前がオレを所有している、という意味だ」

「所有って・・・」

「オレはそういう存在だ。知らなかったのか？」

「いましがた会ったばかりの人間に使えって言われれば抵抗があっ  
て当然でしょうが」

「所有者がいなければ、オレは大きな活動が許されない。そうプロ  
グラムされている以上、使ってもらわなければ困る」

「使つつて、例えばどんな風に？」

「指示を出せばいい。お前の命令は最優先で実行する」

「うーん。じゃあ・・・お水持ってきて」

「断る」

男が即答で拒否。矛盾がないか？

「・・・最優先で実行するんじゃないかったの？」

「お前は、自分の銃に『水を持って来い』というのか？少しおかしいんじゃないか？」

「このやろう・・・」

アルの頭に怒りのマークが出る。だが、グツとこらえる。

「ま、私達を助けてくれたのは本当みただし。・・・で、どうして私の『武器』なの？私よりアンナとかの方がふさわしいと思うけど？」

アルは自分より、戦う術を知らないアンナにこそ『武器』は必要だと感じた。この男がボデイガード的な仕事をしているなら、なおさら自分にはふさわしくない。

「これを握って『契約』しただろう」

男が懐から取り出したのは、あの紅い宝石の組み込まれたプレートだった。

「これと『契約』って？」

「これは【ディーナ・カウンター】だ。オレが射出される座標を認識するためのもの。同時に契約者の証でもある」

「うーん。契約した覚えはないんだけど・・・？」

「『生きて父親と母親に会わせる』がお前との契約だ。オレが完全に破壊されるか、お前が死亡するかのどちらかで契約は終了になる」

「ちよつと、自分を物みたいに」

「当然だ」

アルの言葉を男は遮った。

「俺は『半機械人間』 身体をナノマシンで構築した戦闘兵器だ」

フェルスタウンへ降ってきた男々【】（後書き）

はじまりの物語は次でラストです。

フェルスタウン〜2人の旅人〜〔 〕（前書き）

フェルスタウン編完結

## フェルスタウンく2人の旅人く【】

### 『半機械人間』

その名称は今では全く聞くことができない。

『彼』が造られたとされる時代、それは俗に黄金紀と呼ばれる時代であった。

しかしそれほどに栄えた人類の文明は突如として終わりを告げた。原因が何であったのかもわからず、世界は消えてしまった。

長き戦争が続いた故の滅び

そう解釈されるしかなかったのだ。

国家のほぼ全てが壊滅状態。

秩序すら消え去った地上は、数十年の間混乱が続いたとされている。

とはいっても、アルとアンナが生まれるはるか昔の出来事なので、もはや伝説のレベルであり、男の言った単語などさっぱりわからず

『?????????』

2人揃って首を傾げるしかなかった。

「あの、『ナノマシン』ってなに？」

その言葉に、男はバカを憐れむような表情になった。

「なによ！あんたの言ってることさっぱりなのよ！こちらら科学とやらに関しては素人なんだから、分かりやすく、懇切丁寧かつ、手短かに説明しなさい！」

「・・・どうも、お前はオレの存在を知っていて契約したわけではないらしいな」

「だからそう言ってるでしょ！」

「では、初心者にも分かるよう説明する」

男がどこからかヒョイツとプラカードを出す。

ペンを使い、一糸乱れぬ動きで、正確に人間のシルエットなどを描いて行く。

なんか正確すぎて不気味だが・・・

「『半機械人間』というのは厳密に言えば人間ではない。人間の姿や形をしているのはあくまで地上で活動しやすくするためであり、身体能力をはじめとした様々な点が全く異なる」

「具体的に」

「力、ボディの強度　俺は特に再生機能も備えている」

「うーん・・・見た目からじゃよくわかりません」

「　足元の工具を何か貸してみろ」

「え？じゃあ、これで　」

指示され、アンナが渡したのは分厚い六角レンチ。男はその両端を軽く掴むと　無言で折り曲げた。

「はい・・・？」「え・・・？」

折り曲げられたレンチが静かにテーブルの上に置かれる。

アルがおそろおそろ持ち上げると、強固な金属でできた工具は、ものの見事に変形していた。

筋力を鍛えればどうかという問題ではない。あきらかに人間の業ではない。

目の前でおこった非常識な事態に、啞然とするしかなかった。まるで魔法でも見せられているような気分だった。

「　俺がどういう存在なのか、少しは理解できたか？」

「ええ・・・まあ。なんか夢でもみてるのかな？」

「ほっぺをつねるか？」

「ちよ！やめてよ！今の力でつねったらほっぺたがとれるわよ！？」

「心配ない。今は僅かに出力を上げたただだ。本来は成人男性を上回る程度でセーブしている」

「.....」

アルはまず気持ちを落ち着かせた。その上で大きく深呼吸し、改めて尋ねる。

「私と契約したって言った？」

「『父親と母親に生きて合わせる』、それがお前との契約だ」

「協力してくれるってこと？」

「そのとおりだ」

迷い無い男の目はまっすぐにアルを見据えている。

決して逸らす事も、泳ぐこともない。

『人の眼は真実を映す鏡』  
かつて師に言われた言葉を思い出す。

手がかりに辿り着き、再び歩み出そうとした時、目の前の男は自分の力になると言った。

不安だらけの旅に希望が見えてきたように思えた。

「わかった・・・よろしくね。とりあえず握手　ん？」

アルが、ふと男の手の甲の文字に気づく。

「その手に書いてあるのなに？」

男はスツとアルに文字を見せる。

「『Re』、『I』、『VU』、『N』　　レイヴン？」

「システムとしての俺の総称だ」

「なんだ、名前あるんじゃない」

「システム名だ。俺自身を指すものじゃない」

「じゃあ、私が決めた。あんたはこれから『レイヴン』。私の武器だって言うんなら拒否しないはずよね？」

意地悪に上目づかいで言うアルに、『レイヴン』と名付けられた男は諦めたように呟いた

「　了解した」

誰も起きない早朝、アルは自分のバイクにまたがって、エンジンをふかしていた。

「アルさん！」

トタトタと走って来るアンナにビクツとなるアル。

「ア、アンナ・・・ごめんね。起しちゃった？」

「もう行っちゃうんですか・・・？もっと、いろいろお話したかったのに・・・」

「うん。なんか私のおかげだと思いこんじゃってる人達に悪いしね・・・」

苦笑いを浮かべるアルに対し、アンナの表情は硬い。

あれほどの窮地を一緒に乗り越えたのだ。

2人の間には、すでに知り合いと言うだけでは片づけられないほどの親密さができていて当然だった。

親友とは別れたくない・・・それは互いの気持ちの中に確かにあった。

アルが僅かな沈黙の時間を破る。

「私が旅立てるのはね・・・アンナのおかげだよ」

「え・・・？」

アルは自分の胸にペンダント型にして下げられた【ディーナ・カウインター】を見せる。

「アンナがあの時、これをくれたから、私は両親を探す旅を続けられる。レイヴンにも会えた。ありがとう、私に希望をくれて・・・」

そうだ。アルの旅はまだ終わっていない。両親を見つけるまで続くのだ。

例え、どのような結末を迎えようとも、進むと決めた親友。

その思いを自分が妨げてはいけない、とアンナは自覚した。

「アルさん・・・また、会えますよね？」

寂しさを抑え、そう呟いたアンナの声に、アルは迷うことなく答

えた。

「うん。今度は家族で会いにくるよ！」

「はい！また、会いましょう！  
ところで・・・やけに荷物多いですね？」

アンナがふと見つめたバイクの荷台には、山のような、なにかが風呂敷に包まれ、くくりつけられていた。

「え！？あ、これは」

「街の住人から『サービス』で受け取ったものだ」

バイクの側面に増設され、荷物が満載のサイドカーから声がした。  
「ちよつと、レイヴン！あつさり言わないですよ！」

比較的小さめな小包の山に埋まっていたレイヴンは、その内の1つをヒョイっと持ち上げ、顔をのぞかせる。

「約束の補給のみではあきたらず、街に出向いて世間話をしながら無償提供の物資を大量に集めていたようだ」

「そこまで、詳しく言わんでいい！っていうかなんで知ってるのよ！？」

「アルさん、て・・・意外と『ケチ』なんですね」

「ぐはっ！！・・・そ、そうかな？」

「何をしてる？早く出発しないと、他の住民が起きてくるぞ」

「そ、そうね・・・」

アルが、長い髪をまとめ、風で暴れないよう服の中に入れ込む。

「あ、レイヴンさん・・・？」

「・・・なんだ」

「あの・・・あなたは私の命の恩人です。本当に感謝します」

「・・・気にするな。お前の運がよかった  
それだけだ」

「よし、出発！！」

アルがアクセルをひねる。

エンジンも新調し、馬力の上がった車体は、徐々に加速していく。  
アンナは、あえてさよならのために手を振らなかつた。

だってまた会えるのだから・・・。

両親を探し求める女           アルカインⅡフィアレス。  
空から降ってきた男           レイヴン。  
2人の物語はこれから始まっていく。

> i 1 7 8 3 5 — 3 7 3 <

## フェルスタウン〜2人の旅人〜「」（後書き）

高速更新はこの話で終了。今度は1週間後を目安に投稿したいと思います。

リーゼ・マーノ〜イタズラ少年〜【】

「だれ？ぼくに話しかけてくる・・・」

「苦しい？苦しいの？」

「怒ってる？いや悲しいの？」

「君は・・・だれ？」

荒野を抜け、林の中の道路をサイドカー付きの大型バイクが走っていた。

運転するのは、蒼く長い髪が印象的な女性。

「やっと涼しい場所にきたわね」。レイヴン、調子悪くない？」

よそ見はせず、サイドカーに対して、女性は話しかけた。

「ああ」

レイヴンはそのつけない返事で答える。ウェーブの混じった赤い髪が印象的な男だ。

「どうしたの？どっか具合悪い？」

「休んでいるだけだ。余分なエネルギー消費は抑えているからな」

「ここ数日寝てしかないじゃない」

「いざという時動けないのは困る」

「・・・数時間前にわたしが盗賊に襲われた時は『いざ』というときじゃないわけ？」

「自力で処理したはずだ」

「そりゃ、そうだけど・・・」

「『武器』というのは必要な時に使われるもの。不要な時には休んでいるべきだ」

「なんか、納得いかない・・・」

「お前の銃も向ける相手がいない時は、腰のホルスターに収まっている。それと同じと思えばいい」

「あ、そ。・・・それはそうとお腹は空いてないの？水も飲んでないみたいだけど？」

「・・・オレか？」

「あんた以外に誰がいるのよ。遠慮しなくていいのに」

アルは前の街を出る際に買い込んだ物資にはレイヴンに必要と思われる分も含まれていたのだ。しかし、肝心の彼は食べ物はおろか飲み物すらも口に入れようとはしない。

少し心配になるのも当然だった。

「遠慮はしていない。俺は人間とはエネルギー摂取の方法が違う。それだけだ」

「なにも食べなくて平気なの？」

「ああ。だが、食べられないわけではないぞ。必要な時は食べるマネはできる。お前が望むなら鉄に調味料をかけて食べる事もできる」

「いや、そういう時ないと思う・・・あ、見えた」

アル達が目指す先に巨大なものが姿を現した。

いったん丘の頂上で止まり、ふもとの街を一望する。

遠目からみても、きれいである事が分かるほどに整備された街。

だが、それ以上に視線を引き付ける存在が街の中心にそびえ立っていた。

「すごい大きな樹・・・」

「・・・」

中心にあるのは、雲まで届きそうな一本の巨大な樹木。実に街の5分の1の面積を占める圧倒的な存在感だった。

「巨大樹の街           リーゼ・マーノ、か。あそこで間違いないわね。  
行くわよレイヴン」

「……」

「ちよつと、レイヴン聞いてる？」

「zzzz……」

「寝とんのかい！」

街に到着したアルは、ゲート前でいくつか手続きを行い、無事に入れた。

宿泊用のホテルは街の中心部にあるということで、そこに向かってバイクを走らせる。

この街は、中心部の都市エリアの周囲を民家が囲むシンプルな構造をしている。豊富な自然に囲まれた環境のため、移住を希望する人も多いらしい。

そんな中でもやはり目を引くのは、そびえ立つ巨大樹の存在だった。

遠くからみてもあれほどに巨大であったのだ、近づけばその大きさはまさに圧巻というしかない。

どうやら、木に触れる事は特に禁止されてはいないらしく、観光にも利用されているようだった。

せっかくなので、宿泊所を探す前に巨大樹を見て行く事にした。

「ほんと、大きい……」

近くにバイクを止め、巨大樹の前にアルは立っていた。

周囲には観光客の姿も見え、巨大樹を全員が見上げていたり、シートを広げてお弁当を食べる家族の姿もあった。

空は快晴。木漏れ日がふる影の中は、周囲の人々に不思議な安ら

ぎを与えている。

だが、アルはそんな人々とは何か違うものを感じていた。

(なんか・・・)

近くに来て、どことなく感じる違和感。気にするほどでもないが・

・

「きのせいか・・・」

木に触れてみようと、手を伸ばす。その時

「触るな！」

子供の声と共に石がアルの足元に飛んできた。

「え？」

アルが声のする方を見ると、ブカブカのジャンパーと目差し帽をかぶった少年が、また石を投げようとしていた。

「『マーノ』から離れる！」

ポイポイと飛んでくる石から遠ざかるように、アルは巨大樹の根から距離を置いた。

「ちよつと君！人に石を投げちゃいけないって親から教わらなつた！？」

アルは突然の出来事の意味は分からなかったが、とりあえず失礼な少年を叱る。

「ふん！旅人はいつも『マーノ』を傷つける！今度は許さないぞ！」

「『マーノ』って・・・この大きな木のこと？」

「そうだ！」

「別に私は木を傷つけるつもりなんか」

「嘘だ！また『マーノ』が苦しんでるんだ！この街の人たちじゃないなら、旅人が犯人だ！」

そういうと少年はまた石を投げようとして

「いい加減にせんかあッ！！」

先にアルがとび蹴りをかました。

「あばあ！」

顔面に直撃を受けた少年は、ごろごろと地面を転がっていった。

だが、すぐに顔を押しさえながら起き上がる。

> i20258 — 373 <

「なにすんだよ！」

「こつちのセリフよ！」

「普通の子供なら首折れてるぞ！」

「丈夫な体に生まれた事に感謝しなさい！」

「ひでえ！それでも大人かよ！？」

「大人ですよーだ！」

アルがあまりに大人げない対応をしていると

「見つけたぞお！このイタズラ小僧ッ！」

中太りの警官が遠くから叫びながら走ってきた。

「げ！モンテス！あばよ！」

警察官の姿を見た少年は一目散に逃げ出した。

あつと言う間に市街地に逃げ込んでいったため、走ってきた警官も追うのを諦めたようだった。

「まったく、なんて逃げ足だ！あのクソガキめ！」

旅人さんお

怪我はありませんか？」

「あ、はい。全然」

逆にとび蹴りをかましたことは黙っておくことにした。

「あの小僧はヘレンって言うんですが、あれにケガをさせられたってことで、時々旅人から苦情が出るんです。困ったもので・・・」

警察が説明していると、アルはふと少年の言葉を思い出す。

「あの子、この木が苦しんでる、とか言っていましたけど？」

「ああ、そんな事を言ってますが、単なる悪ふざけですよ。そういうって自分が相手を傷つける事を正当化してるんじゃないですかね？」

（本当にそれだけなの？）

アルは、ヘレンが逃げて行った方を見つめる。

とっさの事でケンカしてしまったが、悪い感じはしなかった。

石を投げて来た時、ヘレンの目に嘘はなかった。むしろ真剣で、悪意は微塵もない。  
その事だけは確信できた。

アルが停めて来たバイクのサイドカー。そこでレイヴンは相変わらず眠っていた。

そこに

「レイヴン」

誰かが話しかけてきた。

「・・・お前か」

レイヴンは目を閉じたまま答える。

「例の『船』を捜している連中がいる」

「・・・」

「引き続き調査を続ける。待機状態を維持しろ」

「了解・・・詳細が分かるまで待機する」

「・・・どうだ、今度の契約者は？」

「わからん」

「・・・そうか」

警官のモンテス＝パウロと話し終えたアルが歩いて戻ってきた。

「ごめん遅くなった　ねえ、いまここに誰かいなかった？」

「・・・いや」

「今会った警察官が言うには、西地区に『セブンズ』っていう情報屋さんがあるみたいだから明日行ってみようと思つた」

「今日はもういいのか？」

「あまり焦ってもどうにかなるもんじゃないし、今日はどこか宿まれるとこ探そう」

「そうか。では探して来るといい」

「って、アンタも探すのよ！」

「何故だ？」

「寢床の確保ぐらい手伝いなさいよ！」

「それならここにある」

レイヴンが、今寝ているサイドカーをドンと小突く。

「横になれればどこでもいいわけ？」

「別に立っていても眠れる」

「そういうこと言ってるんじゃない！」

そんな言い合いをしていると

「おい！」

突然後ろから声をかけられる。振りかえると、

「よ」

さっきの少年がチヨコンと立って、片手を上げていた。

「あ、さっき蹴り飛ばしてごめんね」

アルが謝る。

「子供を蹴ったのか？」

レイヴンが半目で尋ねる。

「まあ、細かいことは気にしない」

「ははは、とごまかした。」

「大丈夫だよ。手加減してくれたんだろ？おかげであ・ん・ま・り痛くなかったぜ？」

だが、ごまかせなかった。

「ぐ・・・あんだ根に持つタイプね」

「やはり蹴ったのか」

「うう・・・」

なんかいまさら悪者にされている気がして、アルはシヨボンとうなだれた。

「すまんな少年。この女は道を妨げるものに容赦しない。目をつけられた時はコインをまけば目くらましになる」

「ほー、あなたの目に、私は『天上天下唯我独尊でお金にがめつい守銭奴』に見えてるわけ？」

「違うのか？」

「違うわ！」

そんなコント（？）のようなやりとりをしていると、

「寝床探してるならうちに来いよ。2人ぐらい余裕で泊まれるぜ？もちろんタダ」

バイクのサイドカーにレイヴンとヘレンを乗せ、アルは目的の場所へのんびり走らせる。

結局のところ無料という言葉が決め手になり、アル達は少年ヘレンの家に厄介になることにした。

その後、ことの事情をレイヴンも把握し、ヘレンがお詫びの意味も含んでいるとのことだった。

互いに自己紹介も済み、ヘレンの家に向かう。

「でも、なんで私にまた話しかけようと思ったの？普通、蹴あんなことになったら怖い人って思うでしょ？」

レイヴンの膝の上に乗って、風に帽子が飛ばされないよう押さえながらヘレンが答える。

「いや、俺がいままで追い払ってきた奴らつて、すぐにどっかに行っちゃうんだ。アルが初めてなんだ。本気で怒鳴って『蹴り』を入れてきたのは」

「なんで『蹴り』の事含めて言うわけ？」

「ま、気にするなよ。そんなんだから、今までの連中とは違って、悪い感じがしなかった。だから謝らないとって思ってた」

レイヴンは、その話を静聴しながら、不思議に思った。

子供には、不思議な直観があると聞いたことがあるが、それはヘレンが純粋な少年であることの表れかもしれない。

「あ、ついた。ここを右」

ヘレンの指示通り、右折。そして、そこにあつた家は

「で、でっか・・・」

目を見張るような巨大な屋敷。さつきまで見ていた民家の数倍はあるだろう大きさであつた。門には動物の像が並び、芝生の整えられた庭が広がっている。

「この街の市長邸宅のようだな」

「ヘレンで市長の子供だったの!？」

「ま、そんなもんだよ。入ってくれ」

若干得意げなヘレンが家の中に入っていく。

バイクをロックし、その場に停車させて、アル達も続く。

アルは、あまり豪華な建物には入った事がないため、キョロキョロと挙動不審。

レイヴンは、いざという時に迅速に脱出するため、キョロキョロと破壊しやすい場所を観察。

「とりあえず親父にアル達が来たことを知らせにいかないと」

そういつて辿り着いたのは大きな木製の2枚扉の前。頭上のプレートには『市長書斎』と書かれている。

ドアをヘレンがノックしようとすると、

「では、私はこれで失礼します」

先に内側からドアが開き、スーツの男が数人出て来た。

「おや？君はヘレン君」

中央に立っているスーツの男が、ヘレンに向かって話しかけて来た。

「久しぶりだね。元気にしてたかい？」

男は気軽に話しているが、ヘレンは無視している

「そういえば『植物の声が聞こえる』って噂を聞いたことがあるんだけど、本当かい？」

「……」

男の問いに対して、ヘレンはブカブカの帽子を深くかぶり、目を合わせないようにして黙っていた。

「あー、ごめんね。いきなり変な事を聞いてしまったね。謝るよ。では客人のみなさんも失礼しました」

男たちは適当に謝罪すると、すぐに反対へ去って行った。

男達の姿が完全に見えなくなると、ヘレンが顔をあげる。

「ヘレン……なんなのあの人たち」

「よく知らない。あいつら、好きじゃないんだ……」

そう言いつつ、気をとりなおし、2枚扉を開けた。

そこには中太りで、口髭を生やした男が椅子に座っていた。紛れもなく市長である。

「帰ってきたかヘレン！お前また旅人さんに悪い事を」

「そのお詫びに連れて来た。アルさんとレイヴンさん。寢床を探してるんだって」

ヘレンが父親の言葉を遮るように2人を紹介すると、市長は、お！、と言って、歩いてきた。

「これは旅人さん。このたびは息子のヘレンがとんだ失礼をいたしました……」

深々と頭を下げる市長。

なんかこつちが失礼なことをしたみたいな気分になる。

（あれ、この2人って……）

「お詫びとってはなんですが、滞在中はこの屋敷を自由にお使

いくださって結構ですので。ああ、あと食事もご用意させてもらいます」

「いえ、そんな泊めていただけで」

「そんな遠慮はなさらず。そうだ。気が引けるのでしたら、旅のお話など聞かせていただければ嬉しいですな」

「じゃあ、それと交換条件ってことで」

「・・・どうしたアル。ここぞとばかりに物資をたつぷりいただかないのか？」

「あなたは黙ってなさい！」

こうしてアル達は市長宅にお世話になる事になった。

## リーゼ・マーノ〜イタズラ少年〜【】（後書き）

仕事忙しくって、更新は結局1ヶ月後に……。しばらくは4日に1度ペースで更新します。よろしくお願いします。

リーゼマーノく決意の可能性」

スーツ姿の男が、自動扉のセキュリティにカードキーをサツと通し、扉をくぐる。

すると、奥から白衣を着た研究員の1人が走ってきた。

「支部長！」

「どうした騒々しい」

「モノクル様がお見えです！」

「なに？」

「ご無沙汰です。支部長」

研究員の背後に現れたのは、片眼鏡をかけた黒衣の男だった。

「モノクル様・・・ご連絡くだされば」

支部長の言葉は、さつと上がった手で遮られる。

「いえいえ。もう来てるのですからその必要はなかったでしょう？」

それより、巨大樹の研究・・・どれほど進んでいるでしょうか？」

黒衣の男はさわやかな笑顔で、語りかける。

「まだ予定の半分ほどですが、新しい情報があります」

「聞きましょう」

「ご案内します。こちらに」

支部長とモノクルはエレベーターで地下の研究施設に降りる。

着いた部屋には、数多くの解析機器。そして、巨大な1本の根がのぞいていた。

ここは巨大樹の下に造られた施設なのだ。

支部長は近くのモニターを操作し、データの一部を開く。

人間の細胞のようなものが映し出される。

「これがなんの細胞であるのかわかりますか？」

「・・・さあ。人間のモノではないようですが」

「驚いた事にこれは、巨大樹の細胞です」

「木の細胞？」

画面に映っている細胞に違和感を覚えたのも無理無かった。

植物の細胞には、『葉緑素』というものが含まれており、光合成をおこなって成長する。だが、巨大樹の細胞とされているものには、それがない。つまり

「この巨大樹は光合成以外の方法で成長しています。いや、もはや植物かどうか疑わしいのですよ」

「植物でないとなると、なんです？」

「植物の姿をした怪物・・・でしょうか」

「ほう、怪物・・・」

「もしかすると意志を持っている可能性もあります」

「なぜそう思います？」

「この木の『声』を聞ける少年がいるからですよ」

外も暗くなり、アルは市長宅で夕飯を御馳走になっていた。

意外な事に、この屋敷の夕飯は市長が作っていた。もちろん手伝いは数人いる様だが。

使用人も全員同じ席でワイワイと話しながら食事を楽しんでいる。

なんでも市長は元シェフとして働いた実績もあるらしく、『食事は皆で囲んでたべるもの』という自論があるらしい。

メニューは、自然に囲まれた土地であるためか、ほとんどの料理に野菜が入っている。

だが、野菜特有の苦みなどは一切なく、素材の甘さや香ばしさの引き立った、素晴らしいものばかりであった。

健康に良く、ヘルシー。市長のプロデュースするレストランは予約が殺到するという事も聞いた。

食後、使用人たちが帰って静かになった頃、アルは市長の書齋に招かれた。

「ようこそ。ウイスキーは好きですか？」

「あ、いえ・・・アルコール以外でお願いします」

「苦手ですか？」

「ええ。とてつもなく・・・」

アルの要望に応え、ミルクティーを作る市長は、

「アルさんは良い人ですね」

不意にそう口にした。

「はい？」

「あの子　　ヘレンが家に人を連れてくるなど、いままでなかったんですよ」

「そうなんですか？」

「普通ならあの子に石を投げられた旅人は怒って抗議してくるものです。しかし、アルさんはそうではなく、ヘレンをまっすぐに見て、そして理解しようとした。その心があの子に伝わったのでしょう」

「・・・以前、私にいろいろ教えてくれた師の教えに従っただけです。間違っただこと少ないですし」

「その若さで素晴らしいことです。・・・薄々はお気づきですか？」

あの子と私の関係に」

「・・・ヘレンは、あなたと血のつながりがないんですね。髪の色や顔つきが全く違っていますから」

血のつながらない親子　　その事は市長とヘレンを比べた時、薄々感じていた。

「ええ、そのとおり。・・・私の妻は子供を宿すことなく亡くなりましてね。そんな時ですよ、あの子を見つけたのは」

「見つけた、というと」

「ええ、街のシンボル『リーゼ・マーノ』はご存じですね。その根元に、木の葉に包まれた赤子のヘレンがいたのです」

「捨て子？」

「はい。私は真つ先に引き取り、里親になりました。なにかしらの運命を感じた。あの子は、血はつながっていなくとも間違いない大切な息子なのです」

言葉にこもる思いが背中越しに伝わってくる。

温もりある父親の風格がそこには確かにあった。

「本当の親は？」

「残念ながら見つかっていません。現在も調査中ですが、発見は難しいだろう、と」

「・・・どうしてあんなイタズラみたいなことを？」

「・・・あの子も私が本当の親ではないと薄々感づいているのかもしれません。直感が鋭いですから」

「・・・あの、ヘレンから『木の声が聞こえる』という話を聞いた事がありますか？その事と関係してるのでは・・・？」

「その話は、あの子から何度か聞きました。しかし、そんなことありえないですよ。木は言葉を話せませんから会話のしようがない」「まあ、それはそうですね・・・」

「親としてあまりに未熟過ぎます。あの子には嫌われているかもしれません、立派に育ててあげたいと思っております」

そういつと、市長は出来上がったミルクティーをアルに差し出した。

温かい甘さを口に含ませて考える。

ヘレンが家に帰って来た時、どこか誇らしげだった。家の風格とか、そんなものではなく、自分の親が立派な人物であることを喜んでいたように見えた。

父親を嫌っているとは到底思えなかった。

レイヴンは屋敷の外の芝生で寝転がっていた。  
夜空には満点の星空が輝いている。

星達が無数に存在する空には、静寂ながら歌っているような錯覚すら覚える。

その光の下にいる男は、

「zzzz・・・」

眠っていた。ロマンなどとは全くの無縁であった。

と、そこへ

「おい、レイヴン」

子供が話しかけてくる。

「zzzz・・・」

当然、無反応。

「おーーーーーいッ!」

近所迷惑級の大声を耳元で叫ぶと、ようやくレイヴンが片目をほんの少しだけあけた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

へレンか

「間が長すぎだろ・・・」

「zzzz・・・」

「寝るなあ！起きろお！」

「・・・なんだ」

「ちよつとついて来」

「断る」

「早い！即答かよ!？」

「当然だ」

「いたいけな子どもが来てくれっていうんだぞ？普通気になるだろ」

「全くならん」

むむ、とへレンは唸ると、諦めたのかその場にドンっと座った。

「なあ、気になってるんだけど訊いていいか？」

「なんだ」

「アルとレイヴンって恋人同士なのか？」

「違う」

レイヴンは微塵の迷いもなく答えた。

「また即答かよ・・・そうなのか？じゃーなんで一緒に旅してるんだ？」

「なぜ俺に尋ねる？」

「だってアルは親父と話してるし、なんか直接聞きづらいし・・・」

「・・・アルが旅をするから俺も付いて行く。それだけだ」

「なあ、レイヴンにとってアルはこういう人なんだ？」

「所有者だ」

「なに？お金で買われたのか？」

「違う。呼びだされた」

「どこから？」

ヘレンの問いに対し、レイヴンはスツと空を指差した。

「『空』だ」

「・・・レイヴンって真顔で冗談言つんだな」

「ジョーダン？なんだそれは？」

「ま、いいや。・・・なあ、話変わるけど、レイヴンって超能力を信じてるか？」

「超能力・・・？」

「『声を出さずに意志を伝えられる』とか。テレパシーだよ」

「それがどうかしたのか」

「誰かが、『俺はテレパシーを使える』なんて言って信じられるかって話」

「・・・俺は見える物しか信じない」

「つまり・・・信じてないってことか？」

「そうも言わん。人間は可能性に満ちた生き物だ。そう言ったものもあるかもしれん」

「じゃあ。おれが今から言う事の可能性・・・信じてくれるか？」  
「お前の創造を、俺は否定しない」

ヘレンは今まで誰にも信じてもらえなかった事を打ち明ける。

自分だけが持つていて、他の人の目には決して映らない『特別な力』のことを・・・

「・・・おれ、『マーノ』 あの巨大樹の『声』が聞こえるんだ。本当なんだ。聞こえるんだよ！『苦しい』って！」

ヘレンは必死に訴えた。

「誰に話しても、誰も信じてくれなかった。頭がおかしいんじゃないかと言われたよ。でも、確かに聞こえるんだよ」

だが、レイヴンの返答はあっさりとしていた。

「・・・だからどうしろと？」

「え？」

「仮にお前にあの巨大樹の『声』が聞こえるとしても、俺には関係のないことだ」

「それは・・・」

ヘレンはうなだれる。

「俺は、所有者のアルを危険にさらす可能性があるなら、お前に協力することはしない」

迷い無く、そのことを告げる。

薄情にも聞こえるが、ヘレンと出会ったのはほんの数時間前のこと。しかも、アルとレイヴンは外から来た部外者なのだ。今会ったばかりの見知らぬ人間に何かを期待されているとすれば、それは間違いだ。

初めて自分に真正面から向き合ってくれた外の人達にどこか信頼できるものを感じて、助けを求めてしまっていた。

「・・・わるかったよ。そうだよな・・・おれアル達に頼ろうとしてた。そんなのまちがってるよな・・・」

「・・・人間は他人の協力を必要する。だが、それに頼ってばかりいる人間は、いずれ自分の可能性を信じなくなる」

「自分の、可能性……」

「お前は、あの巨大樹を傷つける者を許せないのだろうか？」

「ああ」

「なら、まず自分に可能なことをしろ。それからだ」

「可能な事……わかった。おれ、やってみる」

ヘレンは何かを思い立ったのか、立ちあがってその場から駆けだして行った。

すでに日没を迎え、街は夜の静寂に包まれ始めていた。

翌朝

「ふわあ~~~~~い」

ふわふわベッドから起きたアルは、大きく背延びをしてから欠伸もする。

うつらうつらした気分を覚ますため、シャワーでも浴びる事にした。

ワイシャツを床に脱ぎすて、部屋に備え付けられたシャワー室に入る。

愛用の銃入りホルスターは護身のため、浴室内に持ち込んでいる。旅をする上で、ほとんど習慣になっている。

銃自体も防水加工の施された優れたものだ。

「ふう〜」

熱いお湯をかぶり、目を覚ます。

長い髪にまんべんなくうるおいを与え、体も温める。

(さてと、今日は西地区の情報屋の所に )

色々考えながら、シャワー室から出ようと、ドアノブに手をかけようとして

「　　アル。ここにいたか」

外からレイヴンがドアを開けた。

「へ？」

アルは突然のことに呆然。

当然ながら、今の彼女は全裸。

しなやかな肢体だが、華奢ではないスマートな理想の体躯。適度に日焼けしながらも、女性特有の白さが残っており、お湯を浴びた直後のため頬もほんのり赤い。水滴が伝う蒼く長い髪も加え、その姿は何とも・・・エロかった。

「ここにいたのか。・・・どうした、震えているぞ？」

「見るなあああッ！！」

アルが叫ぶのとホルスターに収まったままの銃身がレイヴンの頭に振り下されるのはほとんど同時だった。

「ヘレンがいなくなっただ！？」

身なりを整えたアルは市長の書斎にいた。

「むう・・・学校、『リーゼ・マーノ』や他にもいろいろな心当たりの場所を搜索しているが、足取りがつかめない状態だ」

「そんな・・・」

「警察に動いてもらっているが、正直いってこの街はそれなりに広い。しらみつぶしに探すには手が足りない・・・」

「私達も探してみます」

「申し訳ない・・・客人にまさか依頼する事になるとは・・・」

「気にしないでください」

そう言い、書斎を出ようすると、ふとアルは足を止める。

「　　大丈夫。ヘレンは市長さんの事、とても大切に思ってます」

「……」  
「だから、今度はあなたが信じてあげてください。大切な息子さんのことばを」

外に出ると、レイヴンが待っていた。

「……行くのか？」

「ええ。ヘレンを探さないと……」

バイクにまたがり、エンジンをかける。

「ヘレンという少年の居場所ならおおよそ判明している」

「え？」

不意に出たその言葉に、アルは耳を疑った。

地元の警察が手がかりすらつかめていないこの状況下で、何故レイヴンが情報を持っているのか？

疑念を抱く中、レイヴンが続ける。

「だが、この情報はお前には教えられない」

「！？どうして！」

「危険を伴うからだ。俺は契約した者の生命を最優先するようプログラムされている。その契約者を危険にさらす情報を伝える訳にはいかない」

そういう彼の表情はどこまでも平静だった。

レイヴンは決してクールなわけでも、物事に動じない精神を持っているわけでもない。

ただ、与えられた自分の義務を実行しているだけなのだ。

『言葉を話す武器』 レイヴンが自身をそう揶揄した理由がここにきてようやく理解できた。

しかし、アルにとって理解と納得は違う。

「レイヴン、私との契約は？」

「『生きて、両親に会う』」

「そう。私はそのために旅をしてる。それはまちがいない……」

「なら、余計な危険は避けていくべきだ。今回の事も含めてな」

「そうね……私がもつと独りよがりな人間ならそうしてる」

「……」

「……でも、あいにくお人好しなの。バラバラのままの家族を見て、放っておけない。なにか手助けしてあげたい」

バイクが再びエンジンの出力を上げる。

「第一に私が、納得できない」

「……人間というものは、相変わらずわからん。なぜ、非効率な方法を迷わず選択するのか、理解できん」

「理解できないなら、それでもいい。あんたからの情報なんかなくても、私は自分で探す」

「……俺も同行する」

そう言いながら、レイヴンがサイドカーにドンと乗り込む。

「少年は。今とある施設に捕らわれている。場所は、巨大樹の南側の根元付近」

「その情報って……」

「万が一、お前が独自に情報を掴んでしまえば、俺が隠した意味がない。それよりは、開示し、同行した方が効率的だ」

レイヴンの表情は変わらなかった。しかし、どこか根競べに勝ったようで、アルは気分が良かった。

「大丈夫よ。だって、レイヴンが守ってくれるんでしょ？」

「……当然だ」

「なら、なにも心配ないじゃない」

リーゼマーノく決意の可能性く（後書き）

すみません。遅れております。

リーゼマーノく望む意志、応える力く【】

それは、少年の心を感じる。

恐怖している。だが、その中に確固たる意志が宿っている。

自分を守るうとしていた小さい少年。

その存在は、そのものにとってかけがえのないものになっていた。  
少年を守る。

それが自分が生まれた意味。

少年を拒絶する世界を全て

壊す。

「くそー！ここから出せ！」

ヘレンは、鉄の扉を叩き続けていた。

昨夜から、『リーゼ・マーノ』付近で見張っていたところ、また苦しむ『声』が聞こえた。

こっそり見回してみると、作業服を着た男たちが巨大樹の根から何かを採取している現場に遭遇したのだ。

こっそり誰かに知らせに行こうとしたところ、背後から近付いてきた男につかまり、妙な薬をかがされたあと、意識がない。

気がつけば、この鉄の部屋に閉じ込められていたのだった。

（『マーノ』が苦しんでいたのは旅人のせいじゃなかったんだ。全部この連中の仕業だったんだ・・・！）

なんとしてもこの事を外に伝えないと・・・！

と、外からカギが開く音がした。

「いいかげん静かにしたらどうだこのガキ」

外から入って来たのは作業服を着た男と、

「 やあ、ヘレン君」

前に市長に会いに来ていたあの男だった。

「お前らだったのか！『マーノ』を苦しめてたのは！」

ヘレンが飛びかかるが、すぐにもう一人に抑えつけられる。

「・・・やはり、私の考えは正しかったようですね。ヘレン君、君はあの巨大樹の『声』を聞く事ができるようだ」

「え・・・？」

ヘレンは目を見張った。

いままで、誰も信じなかったその事実を相手の方から指摘されたのだ。

「実に興味深い。君の脳を調べれば、この研究もほぼ完成に近づくでしょう」

「研究つて・・・お前らはいったい何をしてるんだ！」

「聞いても子供の君には理解できません。さ、実験室に連れて行っておいてください。少し用事を済ましてから来ます」

「了解です。支部長」

支部長と呼ばれた男は、踵を返し去って行った。

「くそっ！離せ！」

ヘレンは好きにはさせまいと暴れるが、大人の腕力に敵うはずもない。

「いい加減にしろ、このガキ！」

男がヘレンを殴りつける。

身体を痛みが走る。

子供に大人の拳のダメージは相当なものだ。普通なら動けなくなる。

だが、

「離せ！お前らの思い通りなんかになってたまるか！」  
ヘレンはあがく。

自分はまだあきらめてない。

自分の可能性を信じる。最後まで！

「この」

男がもう一度殴りつけようと拳を振り上げる。

一撃が来る事を覚悟し、目をつぶるヘレン。

しかし、いつまでたってもこない。

ゆっくりと目を開けると

「ぐ……お……」

目の前の男が、床に倒れた。

そして、その後ろには 仮面をつけた男が立っていた。

仮面の男は、一言確認した。

「お前がヘレンか？」

『樹木保護団』

ビルの表の看板にはそう書かれていた。

なんでも、植物の繁殖の研究をしてる団体らしく、数年前突如としてこの街にやってきたそうだった。

農作物の品種改良を行い、その成果はいま、街の繁栄の一旦を担っている。

市長も、この団体に肯定的で、資金援助もしてるらしい。

街の人たちも好印象をもっているようだが……

「ここにヘレンがいるのね」

「ああ、確かだ」

「じゃあ、さっそく」

アルが自動扉をくぐり、受付嬢に挨拶する。

「いらっしやいませ。『樹木保護団』本部へ。本日は見学でしょうか？」

突然の来客にも、受付嬢は営業スマイルでプロの対応。

「あの、ここにヘレンっていうお子様が来ませんでした？」

「特徴を教えていただけますか？」

「すかさずレイヴンがフォロー。」

「身長は140センチ。明らかにサイズの合っていない帽子と身丈に合わない上着を羽織り、礼儀とは無縁の失礼千万な少年だ」

「否、全くフォローになっていなかった。」

「逆に分かりにくいでしょ！」

「少々お待ちください・・・えっと」明らかにサイズの合っていない  
「」

「いいです！出てくるわけないですから！」

当然のごとく該当しなかったため、一旦その場から離れ、ひとまず話し合う2人。

「この設備はあまり優秀ではないようだな。子供1人見つけれられないとは」

「あんな複雑なキーワードで探せるわけないでしょ・・・ここに  
いるのは間違いないのね？」

「確かだ。やはり、ここには街の規範に非合法な何かがある」

「正面から入ったのがいけないのかしら？」

「待て」

レイヴンが、耳に手をあてる。しばらく、すると、

「こっちだ」

おもむろに走り出す。

「あ、ちよつと！」

慌てて、アルも後を追う。

レイヴンは一度外に出て、裏手にまわる。そして、隅に無造作に置かれている、塗装の禿げたコンテナの前で止まる。

「・・・ここが入口だ」

「コンテナに見せかけた入口か」

アルが、扉を開けようとするが、すぐに断念する。

「く、暗証番号が必要みたいね・・・」

扉の脇に隠された入力ボード。これをなんとか解読しなければ先に進む事は

「ふん！」

ゴリン（扉に拳を叩きこむ音）

メキイ（ひねって金具を折り曲げる音）

バゴツ！（扉を取り外す音）

「開いた。行くぞ」

「……なんかデジャブのような気が……」

レイヴンの後続き、アルも侵入（突入）に成功する。

しばらく、薄暗い階段が続いたが、すぐに明るい場所に出た。

「格納庫……？」

そこはまるで、地下に造られた整備工場のようなだった。

だが、今はあまり人影はない。

施設内の明かりはしっかりとついているが……。

「おやおや、誰かと思えば……」

「!?!?」

突然声がした。その方を見る。

「ここは関係者以外立ち入り禁止区画なのですが」

立っていたのは黒衣を身にまとい、片眼鏡をつけた紳士風な男。

「市長さんの息子さんを探してるんだけど……」

男に対し、敵意を向けるアル。

「いいえ……といっても信じないですね。ここにいる時点では……」

「」

「当然よ。ヘレンはどこ？」

「さあ」

アルは瞬時に銃を抜いていた。既に照準は男の額に向けられている。

「答えなさい」

「私は、貴方に用があつてきたんですが？」

「5つ数えるわ」

「せっかちですねえ・・・」

「4」

「私の要件は簡単です。すぐ済みますよ」

「3」

「あ、1つ言っておきますが・・・」

「2」

「余裕は与えません」

「男の姿がかき消えた。」

「え・・・？」

「死んでください」

かろうじて気づいたのは男に瞬時に背後に回られていたことだった。

追いついたのは思考のみ。体の反応は追いつかない。

男の手刀が、アルを背後から貫く 前に、レイヴンが凄まじ

い反応速度で受け止めた。

「いい反応ですね」

「ふん・・・」

> i 2 1 6 7 8 — 3 7 3 <

男が続けざまに繰り出して来る手刀を弾きつつ、同等に反撃するレイヴン。

いったい何がおこっているのか、常人の目には捉えられない速度の打ちあいになっている。

レイヴンが、相手の手刀を大きく弾き、一度両者に距離ができる。

「なんて奴・・・」

アルは体勢を立て直し、銃を向ける。

男は特に構えもせず、手を何度か払う様に振っている。

「・・・さすがは戦闘特化タイプですね。このまま続ければ負けるのは私の方ですか」

そう言いつつ微笑を崩さない男。

「人間の反応速度ではないな・・・」

「この男、レイヴンの事を知ってる・・・？」

いぶかしげな表情のアルと、戦闘態勢を崩さないレイヴン。

しばらくの沈黙が続くが、長くはなかった。

「アルカイン」フィアレスさん」

男がアルの名前を呼ぶ事でそれは破られる。

「私の名前まで・・・あなた何者なの？」

「そうですね。とある組織に所属している者です」

「組織・・・？」

「まあ、上から色々と命令を受けていまして。その1つが『レイヴンの排除』になります」

「なんのために・・・」

「こちらの都合ですよ」

「ろくな事じゃないようね・・・」

「さあ？仕事ですので。とはいえ見ての通り私だけではレイヴンには勝てません。そこで」

「契約者のアル本人を狙った、か・・・」

「そのとおり」

「契約についても知ってる・・・？」

「ええ、本来ならあなた方を『契約』まで持ち込ませたくなかったのですが、現状を見る限りあのギャング集団では荷が重かったようです。フレーム・ギアまで与えたというのに・・・」

まだ記憶に新しいフェルスタウンでの一件。それを思い出し、アルは相手を睨む視線をいつそう強める。

「この前の原因は、あなたのような・・・」

引き金に込める力が無意識に強まる。

この男のおかげでアンナは巻き込まれ、死ぬ寸前にまで追いつめ

られたのだ。

「許せない……！」

「待て、アル」

「レイヴン？」

「状況が変わった」

レイヴンの一言が終わると同時に、施設全体に警報が鳴り始めた。

「む、これは……」

男も予想外であったようだ。僅かに注意がされる。

その一瞬に2人は同時にしかけた。

アルが発砲し、レイヴンが間合いに踏み込む。

「っ!？」

男は、銃弾を紙一重で回避。髪の毛が数本切れ、右眼の片眼鏡モノクルを弾き飛ばす。

そして体勢の崩れた男の身体に、レイヴンの拳が打ちこまれた。

「ぐうッ！」

吹き飛ばされ、フェンスの外に転落した男は、底の見えないプラント内部へと落下していった。

「……どうなった？」

「……わからん」

闇に包まれた奥底は明かりがないため、深いのか浅いのかも分からない。

「とりあえず今はヘレンを探さないと……」

「探す必要はない。状況が変わった、と言ったはずだ」

「どういうこと？」

「ついて来い」

レイヴンが先導し、アルがそれに続いた

2人は再び施設奥へと足を急がせる。

鳴っている警報は、『侵入者あり』とは違うもののようにだった。

それにさっきから施設全体が揺れているような気がする……。

おかげで、こちらの侵入はばれずに済んでいるのだろうか？

「こつちだ」

耳に手をあてつつ、先導するレイヴンの迷いのなさも気になる。そんな事を考えていると

「おーい！アルー！ー！」

聞き覚えのある少年の声。その後、前方から走ってきたのは

「へレン！？」「アルー！」

間違いなく行方不明になっていたへレンだった。

走って来てたへレンをアルが抱きとめる。

「良かった・・・無事だった？」

「ああ、ケガなんてしてない！」

「でも、どうやって逃げて来たの？」

「実は」

へレンが動揺しつつも説明しようとしたが、レイヴンが遮る。

「話は後にしろ。新手が来た」

「へ？」「へ？」

へレンが逃げて来た方向から

『うおおおおおおおおおおお』

様々武器を持ったマツチヨな男たちが大量に追いかけてくるではないか！

「わあああああ！？」「めちゃくちゃ来たあー！？」

「撤退するぞ」

「言われなくても！」

「逃げるー！」

3人は即座に走り出した。

プラント内部、格納庫エリア

「子供に逃げられた？何をしているのですか？」

支部長が部下の報告に溜息をつく。

「申し訳ありません・・・妙な仮面の男が現れ、少年を助けたと・・・」

「」

「仮面の男？」

「はい。詳細は調査中ですが・・・」

「・・・それにしても、警報が鳴りやまないのはどうしてですか？すぐに止めなさい」

「それが、施設内の圧力が急激に高まってきているんです」

「どういうことですか？」

「原因不明です。なにか、外的要因ではないかと・・・」

支部長はしばらく考え、部下に告げる。

「いい機会ですので『あれ』を試してみましよう。起動準備を始めてください」

「え？しかし、まだ完成とは・・・」

「どちらにせよテストが必要です。街の外に運ぶのも面倒でしたし、好都合です」

「・・・わかりました。研究員を緊急招集します」

部下が足早にその場を去る。

支部長には、警報の原因がなんとなくわかっていた。

（『古代兵器』が見覚めてしまいましたか・・・しかし、なぜいまになって？）

排気ダクトに逃げ込み、追っ手をやり過ごしたアル達は、ようやく施設内からの脱出に成功した。

「ふー。なんとかなっただわ・・・」

安堵の息を吐くアル。

「助けに来てくれてありがとな」

「でも、ヘレン。どうしてこんなところに・・・」

「・・・おれの特別な力のことをあいつらが知ってたんだ。それで実験台にされそうになった・・・」

ヘレンは背後にそびえ立つ巨大樹を見上げる。

「気がついたら聞こえるようになってたんだ。『マーノ』から伝わってくるのは、人の言葉とは、全然違う。なんか・・・感情みたいなものなんだよ」

「・・・」

「この街に『じゅもくほごだん』って奴らが来てから、街全体が活気づいて・・・その頃から苦しむ『声』が聞こえだしたんだ」

少年の言葉には、ただひたすらに真摯な思いがこもっていた。

「他の人には聞こえない。おれだけなんだ。『声』を聞いてあげられる奴が助けないといけないんだ」

信じてもらえない　そんな恐れはなかった。

少年にとってそれは確かな現実で、確かにここにあるものだからだ。

「・・・信じるよ。ヘレンにはこの巨大樹の『声』が聞こえるんですよ?」

その言葉に込められた思いをアルは理解した。

少年は真剣な目をしていた。

「アル・・・ありがとう」

「さて、じゃあ市長さんに報告しないと。子供をさらうような連中だもん。きつと街から追い出されるに決まってるわ」

「ああ!」

『　そうそう世の中甘くないと思いますか?』

「・・・」「え?」「なんだ?」

スピーカーを通した声が聞こえると同時に、コンテナから離れた位置にある地面が沈み始めた。

いや、正確には草むらにカモフラージュされていた何かの射出口が展開されているのだ。

地下のエレベーターから何かが上がってくる。そして姿を現したのは

「フレーム・ギア!？」

現れたのは武装を施された機械の巨人。

バイクのヘルメットをかぶった甲冑のような人型の形状。

右手に標準サイズのブレード。左手には、銃身の短いライフルのような銃器を装備していた。その銃器から伸びるノズルは、背面にあるタンクに繋がっている。

『このフレーム・ギア“ジュシール”の実験台になっていただき  
い』

ゆっくりと歩き始めるジュシールから、発せられた男の声には聞き覚えがあった。

市長宅でヘレンに話しかけたあの男だ。

アルはレイヴンに向き直る。

あの時、かすかに覚えている記憶。

空から現れたフレーム・ギア。

その力をレイヴンが持っているのなら

「レイヴン、力を貸して。ヘレンを守るために」

「・・・お前が望むなら、俺は応えるだけだ」

レイヴンが前に出た。

その目が大きく見開かれ、左耳から下がる金色のリングが光り始めた。

リーゼマーノく望む意志、応える力く「」(後書き)

遅れたので2話連続投稿。

リーゼマーノく大いなる母へく【】

はるか上空。

成層圏のはるか先。

衛星軌道上に存在する黒い花のような巨大建造物。

「シグナル認識。座標認識完了。」

その“花びら”の1つが左右に開く。

その中であつたのは青いフレーム・ギア。

射出される先に、黒いプラズマを放つ金色の輪が現れる。

「ブレイズ・ソウル”テイク・オフ”」

電磁力で加速した機体は、輪の中心を通り、その姿を消した。後に残ったのは、散った金色の残光だけだった。

「なんだ、あれ？」

ヘレンが突然現れた青いフレーム・ギアに唖然とする。

空に金色の輪ができたと思ったら、そこらいきなり降ってきたのだ。

「よし、ここはレイヴンに任せて、逃げるわよ」

「え？あれレイヴンのロボットなのか！？」

「そうよ！たぶん！」

「たぶん！？」

「いいから早く！」

レイヴンはすでにコックピットにいた。

だが、そこには座るシートもモニターも、それどころか操縦桿すらなかった。

あるのは青いドーム状の空間だけ。

その中心で、ゆっくりと膝をつく。

拳を床につけると、そこから波紋が広がり、たちまちドーム全面

に拡散する。

「ブレイズ・ソウル」・・・オールグリーン」  
一言呟くと、胸部の装甲が閉じ、起動が完了した。

『待っていましたよ。』半機械人間』の専用機がどれほどのものか、  
みせていただけますか？』

ジュシールが剣を向けてくる。

『……………』

ブレイズ・ソウルは何も返してはこない。

ただ光る赤い両目<sup>ツインアイ</sup>で敵を見ていた。それをそらすことはない。

『沈黙ですか。ではこちらから仕掛けさせていただきます！』

甲冑型の機体が踏み込む。

鋭い一閃を放つ。がブレイズソウルは、正面から肘のブレードで  
苦もなく受け止めた。

「つづけていきます」

なおもジュシールの攻撃は続く。

今度は連続突きの猛攻。速度もさることながら、狙いも的確だ。

しかし、ブレイズソウルはその攻撃に対して、片足を半歩引き、  
避ける受けるで容易にいなしていた。

しかし、ジュシールが攻撃の手を緩めた瞬間、剣を真正面から掴  
んだ。

『なんと！？』

パイロットが驚くと同時に、強力な拳撃が襲いかかった。

胴体への攻撃はまるで鉄球を打ちこまれたかのような凄まじい衝  
撃だった。

軽く数十メートル吹き飛ばされたジュシールは木の根に激突する。

『・・・機体性能はこちらが完全に上だ。降伏するか、破壊される  
かを選べ』

ゆっくりと起き上がった甲冑の機体は、すでに胸部の装甲がひび  
割れて一部脱落していた。

たった一撃で、機体を小破させられた時点で互いのパワーの差は目に見えていた。

機体性能は比べようもなくブレイズソウルが勝っている。

『いえいえ、実験はこれからです！』

ジュシールが装備していた銃をブレイズソウルに向けて発砲する。その銃口から飛び出したのは、弾丸ではなく、液体だった。

『・・・？』

ブレイズソウルは、瞬間的な判断で避ける。

だが、液体銃の連射速度は恐るべきもので、全てを避かわすことは難しかった。

ついに、足先と左腕がとらえられた。

『さあ、実験の始まりです』

『なに・・・？』

液体が急速に固まっていく。いや、硬化していくといった方が正しかった。

命中した関節部分が動かなくなる。

『気づいても遅いですよ』

ブレイズソウルに追撃の連射が浴びせられる。

さっきの時点で、足に命中していたため、満足に避けられずほぼ全身に硬化液をあびてしまった。

すぐに硬化が始まり、機体の可動域が制限されていく。

バランスが保てなくなり、機体が傾くが、片膝をつきなんとか転倒をまぬがれる。

『これは・・・樹脂』か』

『そのとおり。これはあの巨大樹【リーゼ・マーン】から採取した特殊樹脂です。通常のものとは異なり、硬化する特性を備えていることに着目しましてね。なんとか実用化できないかと開発していたものです』

雄弁に語る声がジュシールから聞こえてくる。

『戦闘に用いるのは今が初めてなのですが、うまくいきました。あ

あなたの力自慢の専用機すらこの樹脂の硬化は破れないようですね」

ジュシールが剣を構えなおし、近づいてくる。

「あなたの破壊は最優先ですから。成功のあかつきには素晴らしい特権がいただけるものでね」

「特権……？」

「とある“船”への切符とでもいいでしょうか。それを得るためにみんな必死なんです」

ブレイズソウルは、いまや身動きを封じられ、完全なオブジェと化していた。

そしてその眼前にまでジュシールがやってきて、剣を振り上げる。

「これで切符は私の物……実験は成功です！」

振り下ろされる刃。狙いはコックピット。

だが、その切っ先がそこに届くことはなかった

「その情報、詳しく話してもらおうか……」

止められていた　ブレイズソウルが動いている。

「な、に……？」

ジュシールから信じられないと言った呟きが漏れる。

「“リミットアウト”」

ブレイズソウルの後頭から伸びる“髪”の色が急激に紅く染まっ  
ていく。

最終的には紅蓮とも言える状態にまでなり、火の粉のような粒子  
が舞い上がる。

さつきまで固まっていた強固な樹脂がまるで薄い氷のように次々  
とひび割れ、砕けていく。

「こ、これはいったい　はッ!??」

気づいた時には、遅かった。

ブレイズソウルは左手で、ジュシールの腕をとらえており、後退  
を許さない。

そして、すでに右手には　青く渦巻くエネルギーの球体が出  
来上がっていた。

『 “ハウンド” ツー！ 』

> i 2 1 8 9 1 — 3 7 3 <

一気に引き寄せられたジュシールの胴体に今度は圧縮されたエネルギーの渦が叩きつけられた。

『 ぬおおおお！？ 』

接触した場所から装甲が砕け、融解し、四散していく。

元が細身の機体だけに、一点集中で送り込まれた強大な破壊力に耐えることはできなかった。

『 悪いが。実験は失敗だ 』

レイヴンのイヤリングが音をたてて揺れた。

爆発。

胴体が粉々になり、機体の四肢が周囲に飛ぶ。

上空に飛んだ後、再び落ちてきた頭部をブレイズソウルが片手でつかまえる。

紅蓮色の“髪”の色が徐々に銀色に戻っていく。

その様はまるで、鉄が冷えていくかのようにも見えた。

装甲の隙間から一気に蒸気が吹きだす。

『 お前の知る“船”の情報を話してもらおう 』

ブレイズソウルがわしづかみにしている機体の頭部はコックピットにあたる部分だった。

ジュシールは、胴体を特殊樹脂の貯蔵タンクにしていたため、操縦席は頭部に設計されていた。

それを踏まえた上で、胴体を狙って破壊したのである。

『 ……さすがは『半機械人間』ですね。急造の試作機では歯が立ちませんか…… 』

『 質問に答える 』

『残念ですがお断りします。．．．まだ戦いは終わっていませんよ？』

ブレイズソウルが反応する。

突然、背後から襲ってきた攻撃をガードした。

それをはじき返し、すぐに振り返り、相手の正体を見る。

『これは．．．』

戦いの行方を見守っていたアルとヘレンは目の前の光景に目を丸くした。

「うそ．．．」

「マーノが．．．動いてる」

街の中心に立つ巨大樹【リーゼ・マーノ】。

不動であるはずの存在は、地に埋まっていた根を動かし、地面を砕き始めていた。

その葉を赤く染め、まるで怒っているかのように。

周囲の地盤が盛り上がっていく。

(まずい、ここは危ない．．．！)

アルはそう直感し、逃げ道を探す。

だが、周囲はすでにひび割れてきており、見渡す限り安全な場所の見当がつかない。

その時、上から巨大な手が差し出されてきた。

『乗れ』

ブレイズソウルの手だった。

すぐに飛び乗り一時的に避難する。

すると今さっきまでいた地面が、砕けて崩落していく。

「か、間一髪．．．」

風で揺れる長髪を押さえながら、地面を見下ろすアル。

「レイヴン！サンキューな！」

ヘレンの方は若干はしゃぎ気味である。

『 やはり暴走しているようです』  
ジュシールから声がした。

「 どういうことなんだ？ どうして『樹』なのにマーノは動けるんだよ！？」

『 ……ヘレン君。君はあの巨大樹がどこにでもあるような『樹』だと思っていたのですか？』

「 え？ 」

『 君だけとはいえ、人と』話せる』樹などこの世のどこにもありません』

「 ……アル、樹って大きくなったら喋れるんじゃないのか？ 」

「 たいていは喋らないわよ 」

「 し、知らなかった……。じゃあ、マーノは一体何なんだよ！？」

『 ……あの樹は、古代の技術で造られた生物兵器ですよ』

「 生物兵器……。 」

「 生物平気……。？。動物が好きなのか？ 」

「 違う違う。生きてる武器って意味 」

『 一応、失敗作の部類とされたんでしょう。当時はただの木にしか見えなかったでしょうから』

「 失敗作なわけじゃないでしょう！ このままじゃ街1つなくなるわよ！？」

大小様々な根っこが地上へ、徐々に伸びて、地盤を崩す面積を広げている。

木は、自身を安定させるため、地面の下に広く、深く、膨大な根を張りめぐらせている。

そしてあの巨大樹【リーゼ・マーノ】の大きさから考えると、この街全体がすでに根の上にあると考えるのが妥当だ。

このままつづけば、街は崩壊してしまう。

「 どうすれば……。 」

危機感をつのさせるアル。

だが、ヘレンが感じていることは違っていた。

「……なんか、辛そうにしてる」

「辛そう?」

「マーノから感じるんだ……怒りもあるけど、なんか苦しそうなんだ」

『当然ですよ。あの巨体で、しかも元々は動いたりしないものですから。力を発揮するとなればそれこそ、多くの生命力を必要します。もう限界が近いようですよ』

「でも、どうして今頃……」

「……ヘレンのためよ」

「おれの?」

「きつと、ヘレンを助けるために最後の力を使う決意をしたのよ……」

おびただしい量の紅い葉が空から雨のように降ってくる。命をすり減らしていく様をつつすかのように。

「……アル、レイヴン……おれ、マーノを助けたんだ」

「うん、わかってる。どうすればいいの?」

「マーノと話すには、幹に直接触れないといけないんだ。そこまで連れて行ってくれ!」

「聞いてたレイヴン?」

『……了解。なるべく配慮するが、振り落とされるな』

ブレイズソウルは、ジュシールの頭部を遠くに放り投げる。

敵のパイロットが何か言っていたような気がするが、気にしない。機体が、巨大樹本体に向かって突進する。

根は明確な意思で襲いかかってきた。

初めは回避できていたが、なにせ太く、数も圧倒的。当然避け続けることはできない。

「 “ライセンス” 」

左肘部分についたブレードが白く発光する。

それを横に一闪し、襲い来る根の集団を薙ぎ払う。

根が切り裂かれ、燃え落ちるが、後続がすぐにやってくる。

「なんて数 わっ!?!」「うおっ!?!」

機体が激しく揺れる。アルはヘレンが振り落とされないよう、一緒にしがみつく。

ブレイズソウルがさつきより後退している。

相手の物量もあるが、ブレイズソウルの機体特性も理由だった

ブレイズソウルは『戦闘』に特化した機体である。

腕についたブレードや今見せた強力なエネルギー波は、どれも対フレームギア戦で威力を発揮した。

だが、その反面、攻撃できる範囲が狭い。

目の前に群がる無数の根をまとめて一掃するにはあまりに不向きと言ってよかった。

なんとか、一点突破を試みるも、開いた部位を他の根があつという間に埋めてしまう。

加えて、右手にはアルとヘレンを抱えているため、激しい機動も制限されている。

根を切っては、埋められ、左右からの襲撃を回避。今度はエネルギー波をぶつけるも、結果は繰り返し。

そしてついに、ブレイズソウルの片足が根に捕えられた。

『く・・・!』『うわあ!?!』『いつ!?!』

機体が片膝をつき、踏みとどまる。手の中にいたアル達も、凄い高さから落下する感覚を味わったが、なんとか無事。

しかし、動きの止まったブレイズソウルに、根が殺到して来る。

このまま、根の津波に押しつぶされる。

その時、2本の光が、空中を走った。

光の正体は、高密度に圧縮されたプラズマエネルギー。

それは、機体を押しつぶそうとしていた根の大軍に突き刺さる。

そのまま左右に開いていき、囲んでいた根もまとめて焼き払った。

「え?」「な、なんだ!?!」

ブレイズソウルが放ったものではない。

光が飛んできた方向を2人が振り返る。

崖の上に、一体のフレームギアが立っていた。  
細身のボディの機体。特徴的なのは両肩にそれぞれある巨大な2  
連装の砲身。

そこから、プラズマの粒子が噴き出している。

『来たか……。捕まっている。一気に突破する』

根の拘束を引きちぎり、ブレイズソウルが走りだす。

当然、根の軍団が道を阻もうとするが、再び後方からプラズマエ  
ネルギーが走り、機体周辺の根を薙ぎ払っていく。

謎の機体のプラズマ砲撃が道を開き、撃ち漏らした少数の根をブ  
レイズソウルがブレードで切り裂く。

見事な連携で、ついに機体は【リーゼ・マーン】の幹寸前にまで  
迫る。

だが、最後に元々地上に露出していたフレームギアの数倍はある  
うかという巨大な太さの根が持ち上がる。

振り下ろされたものをまともに受ければ、並みのフレームギアな  
どひとたまりもない。

謎のフレームギアの砲身の先端にプラズマ粒子が集束していく。

先の数倍はあろうかという威力の砲撃を放つ気なのだ。だが、

『撃つな』

レイヴンの一言で、砲撃は中断された。

代わりに、“紅い髪”のブレイズソウルがエネルギーチャージを  
完了させる。

『“ハウンド”最高出力　砕ける！』

極限まで集束されたエネルギーと巨大根が正面衝突する。

だが、いくら巨大だろうと、相手が単体なら、ブレイズソウルに  
破壊できないものはない。

放射状に拡散した破壊に一瞬も耐えられず、巨大根は渦を巻いて  
砕け散った。

最後の一撃を突破した機体は、勢いそのまま幹に突撃し、肘のブレ  
ードを突き刺して自身を固定した。

だが、2人を下ろそうとして、右腕を下げた瞬間、後方から追いついた1本の根がその腕を叩いた。

「うわああああ!」

「ヘレン!?!」

先に降りようとしていたヘレンが振り落とされた。

アルがその後を追って飛び降りる。

「ち……!」

機体を動かそうとしたが、追いついてきた根にあつという間にがんにがらめにされ、ブレイズソウルは動きを封じられた。

アルが空中でヘレンをつかまえ、腕の中に抱え込む。

(まだ高い……!)

瞬間的な判断で、銃を抜く。それを直下に全弾連射。

そして、根の上に落下する。

「ぐッ!」

背中から落ち、しばらく転がって止まる。

「アル!」

「だ、大丈夫……反動で落下速度を、落としたから……。それよりも、急いで!」

「あ、ああ!」

身体を起こしたアルは、戸惑うヘレンの背中を押す。

ヘレンは幹の前に立ち、頭上を見上げる。

赤い葉は今や、地面の方に面積を広げている。

夕暮れの空が見える。はつきりと。

(マーノは探しているんだ。守るべきものを だから、)

少年は両手で、巨大樹にそつと触れた。

「」

「マーノ、わかる?おれだよ……」

「」

嬉しくて、泣いてるのか?

「もう大丈夫さ・・・今のおれには頼れる人達がいるから。」

「マーン・・・おれ、間に合わなかった？消えてしまうの？」

「わかった。もう泣かない。今度はおれが守るよ。絶対に。」

「約束する。いままでありがとう・・・」

「おやすみ・・・“お母さん”・・・」

## リーゼマーノく受け継がれし命

巨大樹の暴走があつたにもかかわらず、街の被害は意外と少なかった。

というのも、根の暴走で崩落したのは【樹木保護団】の秘密のプラントがあつた区画に集中しており、開発の進んでいないほぼ無人のエリアであつたからだ。

【古代兵器の暴走！樹木保護団の恐るべき実態が明らかに】  
次の日の新聞の一面を飾つた見出しである。

実質的に甚大な被害を受けたのは、無人エリアに展開していた【樹木保護団（仮）】を名乗っている組織でのみあつた。

街のシンボルを秘密裏に研究していた事実はヘレンから市長を通して民衆に伝えられた。

それにより、これまでの自然保護のイメージからかけ離れた企業実態が暴露され、支持を失つた組織は撤収を余儀なくされた結果になる。

【樹木保護団（仮）】としても、生命活動を停止した巨大樹を研究価値なしと判断したのだらう。引き際もあつさりしていた。

そう、巨大樹リーゼ・マーノの生命活動は止まってしまった。

昼に人々を癒していた木漏れ日をつくっていた葉は全て落ち、木の鼓動も枯れていた。

空っぽの木　　今、巨大樹を現す言葉はこれしかなかった。

何故、巨大樹は動いたのか。

『【樹木保護団（仮）】が、木の怒りを買つた』とか、『自然をないがしろにした人間への警告』とか、いろいろな憶測が民衆の間で飛び交つた。

だが、『1人の心の通じた少年を守りたかつた』という真相は、当事者たちの胸にしまわれることになつた。

その中心にいた少年がそれを望んだからだった。



市長宅の庭にあるスクラップを見て、アルは絶句した。

「私のバイクが……」

それは元はアルの乗っていたバイクのなれの果てだった。

「崩落した区画に停めていたからな。無事な方がおかしい」

レイヴンが後ろから冷静に分析。

「わたしのばいくわたしのくばいくわたしのばいくわたしのばいく・

……」

だが、アルはブツブツとつぶやいて、スクラップにしがみつぎ、えんえんと大滝の涙を流しているばかりだった。

「アル、壊れてないか？」

レイヴンの横で見ていたヘレンは、その姿に少しひいている。

「こういう時は、コインをやると立ち直る」

「アル。少ないけど、これで立ち直ってくれ」

コイン一枚をスツと差し出す。

「立ち直れるか！」

「だが、コインはもらうのか」

「もらえる物はもらうのよ！」

「よかった！アルが元気になったぞ！」

「まあ、壊れちゃったものはしかたないし……でもこれからどうしよう。そうだ！市長さんに頼んで新しいバイクを

「この街、バイク売ってないぞ？」

「おわった……」

「アル、コインだ」

「やかましい！（素早くかつさらう）」

バイクという移動手段を失ったことはアルの旅にとって相当な痛みだった。

愛着があつたのも確かだが……。

「エンジンでお湯沸かせて便利だったのに……」

「お前の愛着はその程度か……」

「いや、意外と重要よ？お湯のあるなしで」

「おお、こちらにおいででしたかアルさん」

そこに市長が帰宅してきた。

「あれ？親父もう仕事おわりか？」

「今日はお前の勉強をみてやろうとおもつてな」

「ソ、ソナナ心配シナクテモ……」

「なぜかた言になるんだヘレン？」

あれから、ヘレンと市長が互いに抱いていた誤解は簡単に解けた。元々が些細なすれ違いであつたので時間の問題であつただけだ。

まあ、少しばかりアルも後押ししたが……

「市長さ〜んんん！！」

そのアルは、市長に事の事情を涙ながらに説明する。

「それはたしかに大変ですな。わたしとしても何かして差し上げた  
いのですが……」

市長はしばらく黙考し、すぐに顔をあげる。

「では、こうしましょう。新しいバイクをこの先の街に発注してお  
きます。そこに行く列車のチケットを差し上げますので、アルさ  
ん達がそこに向かつてもらうというのは？」

「列車？」

「はい。この街は流通の拠点の一つでもありますので、日に何度か  
列車が通っているのです。幸い、駅も無傷ですし、列車は通常運行  
快的な旅を楽しめますぞ」

「うーん……」

正直なところ、次の目的地は決まっていなかった。

あれから街の情報屋にも両親の情報がないか尋ねてはみたが、有  
力なものなし。

情報は途切れてしまっていた。

だが、街をむすんでいる交通手段があるのなら、それを利用して  
いる可能性は高いはず。

いろいろ考えた結果、アルは列車を利用する提案を受け入れたの  
だった。

数日後、ヘレンと市長はアル達の乗りこんだ列車を見送った。

見えなくなるまで手を振り続けたヘレンは、自分の手の中にあるも  
のを見つめた。

それは数粒の小さな種だった。

あの日　　リーゼ・マーノと最後に心を交わした時、手の中にあ  
ったものだ。

これが、巨大な樹の母から渡された物なのかはわからない。

でも約束した。こんどは自分が守る、と。

（　　自分の可能性を信じる　　）  
出来るはずだ。

レイヴンが言った言葉を胸に、少年は種をかつて巨大樹であったも  
ののそばに種を植えた。

毎日、かかさず水をやった。

毎日、かかさず雑草をとった。

毎日、かかさず様子を見守った。

そして　　ちいさな命は芽吹いた。

## リーゼマーノく受け継がれし命く（後書き）

リーゼマーノ編は完結。次回は水の都だったような気がする。やはり不定期更新の運命からは逃れられなかったものであった……。話がまとまり次第、投稿いたします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5421q/>

---

彼方に届く声

2011年4月13日01時10分発行